

博士学位論文全文要約

論文題目：哲学の幼年期 - サラ・コフマン『オールドネル通り、ラバ通り』読解 -

ファヨル入江 容子

1. 本論文の対象と目的

本研究は、20世紀フランスのユダヤ系哲学者サラ・コフマン（Kofman, Sarah : 1934-1994）の自伝『オールドネル通り、ラバ通り』（*Rue Ordener, rue Labat, Paris, Galillé, 1994*）の読解を通じて、彼女の幼年期の思い出が、のちに育まれた哲学的思考をいかに基礎づけたのかを明らかにするものである。

読解にあたり、2017年7月27日、28日および8月1日から4日の6日間、フランス、カーン Caen 近郊サンジェルマン・ラ・ブロンシュ-エルブ Saint-Germain la Blanche-Herbe の IMEC（Institute Mémoire de l'édition contemporaine : 現代出版資料研究所）において草稿調査を行ない、印刷されたヴァージョンとの相違点に注目した。

2. 本論文の構成

本論文は、3部構成となっている。

序

第1部 父の喪

第1章 サラの幼年期

第1節 サラの家族 / 第2節 オールドネル通りでの暮らし / 第3節 ヴィシー政権下のフランスにおけるユダヤ人と外国人の排斥 / 第4節 ヴェルドローム・ディヴェール事件-父ベレクと同級生エレヌの検挙

第2章 父の不在が意味するもの

第1節 父検挙の場面-草稿との相違点の比較 / 第2節 父の祈りと「労働」＝「死」の拒否 / 第3節 「無限」との関係 / 第4節 「罪」を発明するユダヤ人と「悲劇」を発明するギリシア人

第3章 「赦しの不可能性」

第1節 悲劇か悪夢か / 第2節 サラは、何に、あるいは、誰に見捨てられたのか / 第3節 斜線を引かれた詩篇 137 編-「復讐」の断念

第2部 母の喪

第1章 母との蜜月

第1節 分離不安 / 第2節 「封印」

第2章 2人の母との不可能な共生

第1節 ラバ通り rue Labat-向こう側 Là-bas / 第2節 メメへの近親相関的同性愛と実母の嫉妬 / 第3節 母 vs メメ

第3章 融合する二人の《母》と不在の《父》 - レオナルドとサラ

第4章 母のための喪の作業

第1節 《母》の暗い部屋あるいは悪夢 / 第2節 失われた「葉書」 / 第3節

第3部 メメの喪

- 第1章 メメあるいは「諸国民の正義の人」-「自伝」と「救助談」の差異
- 第2章 メメへの感謝
- 第3章 メメの神秘化-サラの贈与
- 第4章 メメの脱神秘化-アナンケーとしての「女性性」の受け入れ
- 第5章 「赦しの不可能性」と「笑い」

結語

補論 「不安と《笑い》によるカタルシス-クラインとヒッチコック」

参考資料 『オールドネル通り、ラバ通り』草稿調査資料

参考文献

3. 各部各章の要約

序

コフマンは、ポーランド系ユダヤ人の両親のもと、パリに生まれ、ニーチェ生誕 110 周年を記念する 10 月 15 日に自らの命を絶つまで、パリ第一大学ソルボンヌ・パンテオンで哲学教授として教鞭を執った。フロイト精神分析とニーチェ研究を主軸としながら、プラトン、カント、ルソーといった西洋哲学史上の巨人たちのテクストを丹念に分析し、客観的かつ普遍的な「真実」を提示しているはずの哲学体系が、実は、著者自身の幼年期に由来する主観的な「真実」に無縁ではないことを示そうとした。すなわち、彼女は、哲学や精神分析のテクストを著者たちの「自伝」として、読み替えようとしたのである。こうしてコフマンは、生涯に、30 冊あまりの著作を残したが、生前、最後の著作となった『オールドネル通り、ラバ通り』は、彼女自身の自伝であった。

ナチス占領下のパリで、コフマンは幼年期を送った。ユダヤ教正統派の一派ハシディズムのラビであった父ベレク (KOFMAN, Berek:1900-1943?) は、アウシュヴィッツ強制収容所へ連行され、自身も、ユダヤ人検挙におびえながら、母とともに、メメ mémé と呼び慕うことになる同区ラバ通りのフランス人女性のもとに身を隠さなければならなかった。父の不在。実母と養母-異なる伝統を持つ二人の母-との葛藤。自伝には、ショアー (ユダヤ人迫害) を生き延びた少女が、自らの人生を選択し、哲学者となるまでが描かれている。

コフマン哲学の独自性は、ひとつに彼女の過酷な幼年期の記憶から説明できるのではないか。このような問いが成り立つ根拠は、『オールドネル通り、ラバ通り』の冒頭の一文にある。

彼 (父) から私に残されたものは 1 本の万年筆だけだ。[...] 私がそれを捨てようと決心する前に私のほうが早々と「見捨てられた」« lâcher »のだが、その後も私はずっと手放せないでいる。スコッチ・テープで応急処置されたままの姿で、それは今

も私の目の前の仕事机の上であって、私に「書け、書け」と強いてくる。

私がこれまでに書いてきた多くの本は、<それ> ça を物語るために、横断してこなければならなかった道だったのかもしれない¹

この一節は、自伝『オールドネル通り、ラバ通り』に至るまでの著作、その余白や背後にも、コフマンを書くべく動機づけていた名づけようのない衝迫-「それ」-、自伝に描かれた幼年期の経験に由来する、ある主観的な「真実」への確信があることを遡及的に示している。コフマン哲学を本質的に理解する鍵は、ここに提示された「それ」にあるといえよう。

本研究は、コフマンが物語ろうとした「それ」の輪郭を縁取るべく、父との死別、および、母とメメ、二人の母との関係と彼女たちの死について、コフマンがいかにか語りようとしたのか、すなわち、フロイト精神分析でいう「喪の作業」Trauerarbeit をいかにかして行ったのかを、自伝『オールドネル通り、ラバ通り』を中心に、他の著作も参照しつつ探る試みである。

先行研究

サラ・コフマンの日本における一般的な認知度は、20世紀後半以降の「フランス思想」の枠組みにおいて、盛んに紹介されてきたジャック・ラカン、ジル・ドゥルーズ、ジャック・デリダといった思想家のそれに比べれば、低いと言わざるを得ない。英米圏フェミニズム・ジェンダー理論の文脈の中で、「フレンチフェミニズム思想」の担い手の一人として触れられることはあったが、その紹介の仕方は必ずしも十分とはいえなかった。たとえば、サラ・コフマンに触れた数少ない論者のひとりである上野千鶴子においても、コフマンを「哲学者」ではなく、「精神分析家」として採り上げ、さらに、イギリスのクライン派心理学者ジャネット・セイヤーズの *Mothers of Psychoanalysis*(1991)の著者にコフマンを擬するなどの誤認と混同が見られた²。

コフマンは、西洋形而上学が構築してきた「女性」に関して批判的考察を試み、フェミニズムに影響を与えたが、先に述べたように、自身は「フェミニスト」とは自称せず、フランスにおける女性解放運動(MLF)にも参加しなかった。また、フランスおよびフランス語圏におけるフェミニズムおよび女性思想史には、英米圏フェミニズム・ジェンダー論とは同じ文脈では語ることはできない別の思想的土壌がある。こうした中、棚沢直子は、フランスにおける女性思想史を正しく紹介し、そこにサラ・コフマンを日本ではじめて位置づけた³。彼女は、自身もコフマンについての論考を発表しているが、とりわけ、木村信子とともに、フランソワーズ・コランが編集した『グリフ手帖』のコフマン追悼号を『サラ・コフマン讃』と題して、2005年に翻訳・出版した意義は大きく、日本におけるコフマン研究の礎を築いたといえる。しかし、2005年以降は、今崎高秀が、ニーチェ研究の文脈でコフマンのニーチェ解釈を考察した⁴以外は、コフマンを主題とする研究はほぼ皆無に等

¹ KOFMAN,1994a, p.9.

² 信田さよ子『それでも、家族は続く—カウンセリングの現場で考える』、NTT出版、2012年、190頁。(対談「スライム母と墓守娘」、『ユリイカ』40巻14号、青土社、2008年12月初出。)

³ 棚沢直子編『女たちのフランス思想』、勁草書房、1998年。

⁴ 「『メタファー』について—サラ・コフマン『ニーチェとメタファー』から—」『哲学年

しい。

コフマンは、その死から 10 年以上もの間、本国フランスでは忘却されていた。マチュー・フラコヴィアック FRACOWIAK, Mathieu は、こうした知的忘却について、以下のように説明する。それは、コフマンが「自分の体系を打ち立てなかったために哲学者ではなく、解釈者にすぎない」⁵とみなされてきたからであると。

コフマンに捧げられた論文集としては、英米圏では、1999 年に出版されたペネロペ・ドイッチャー (DEUTSCHER, Penelope) とケリー・オリビエ (OLIVER, Kelly) が編集し、199 年に出版された *Enigmas : Essays on Sarah Kofman* (New York, Cornell University Press) と、2008 年にティナ・シャンター (CHANTER, Tina) とプレシェット・アーミット (ARMITT, Pleschette) が編集した *Sarah Kofman's corpus* (New York, State University of New York Press) が挙げられるが、久しく忘却されていた本国フランスをはじめとするヨーロッパ圏では、没後 20 年にあたる 2014 年を境に、コフマン再読の機運が高まっている。

哲学者であり歴史家であるイザベル・ユレルヌ⁶ (ULLERN, Isabelle) は、「コフマンの忘れられたことば」を聴き取ろうと、現代出版記憶協会 (IMEC : L'institut Mémoire de l'Édition Contemporaine) で、まだ十分に仕分けが進んでいないコフマンの資料群の調査を文書館員とともに進めた。

生前のコフマンのパートナーのアレクサンドル・キリトソス (KIRITSOS, Alexandre) によって、同協会に「サラ・コフマン」蔵書・資料コレクション Fonds « Sarah Kofman »が、創設されたのは、1996 年の初めのことである。ユレルヌ氏によれば、少なくとも、90 年代末から誰もがこれらの資料を閲覧できる状態ではあったものの、2014 年まで、それらが調査された形跡はほとんどなかったという。彼女の調査で発掘された草稿および他の貴重資料は、2014 年 5 月に、コフマンと交流の深かったジャン＝リュック・ナンシー、ジネット・ミショー (MICHAUD, Ginette : 1932-) を中心に、「いかにサラ・コフマンを読むか？」Comment lire Sarah Kofman? と題して行われた国際セミナーではじめて紹介された。翌年 2015 年には、ユレルヌとピエール・ジゼル (GISEL, Pierre) によって、『共同思考すること？ <関係なき関係>—ブランショの読者、ジャン＝リュック・ナンシーとサラ・コフマン 附モーリス・ブランショからサラ・コフマンへの 3 通の書簡』(未邦訳) *Penser en commun ? Un « rapport sans rapport »*. Jean-Luc Nancy et Sarah Kofman lectures de Blanchot avec trois lettres de Maurice Blanchot à Sarah Kofman が出版された。また、続々と若手研究者たちが博士論文を提出している。その中で、カロリーヌ・フェイエルターグ (FEYERTAG, Karoline) の学位論文は、2014 年に *Sarah Kofman Ein Biographie* として書籍化され、本論文でも参照した。

以上の先行研究を踏まえた上で、本博士論文の意義は、3 点ある。第 1 点は、これまで、《母—娘》関係の文脈で読解されることが多かった⁷『オールドネル通り、ラバ通り』を不在の《父—娘》関係の文脈を考慮に入れて、読解する点である。2 点目は、「喪」に関してである。コフ

誌』38 号、法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻、2006 年、73 頁～90 頁。

⁵ FRACKOWIAK, 2012, p5.

⁶ 彼女は現在、私立高等教育機関 Faculté libre d'étude politique et en économie solidaire (FLEPES : 政治学および連帯経済学部) の学部長を務めている

⁷ cf. COLLIN, Françoise., 1997. 棚沢直子、2004 年。

マンは、「父の死」については前出書および『窒息した言葉』（1987）において、語っているが、二人の母の「死」については顕在的には触れていない。しかし、本論文は、二人の母についてもコフマンは、「喪」の作業を行っていたとの解釈を試みる。そして、3点目は、コフマンは、デリダのように「赦し」pardonの問題系を決して口にするとはなかったが、彼女の主要テーマである「笑い」が、「赦し」の問題系に接続する可能性の提示である。これらの3点において、本論文の独自性を主張したい。

第1部 父の喪

第1部では、父ベレクの「死」をコフマンが、いかに語ろうとしたのかについて検討した。

第1部第1章 サラの幼年期

第1章では、コフマンの家族、時代背景、ヴィシー政権下のユダヤ人迫害事件について考察した。コフマンの両親は、ポーランドからフランスへ移民したアシュケナジム系ユダヤ人であった。1929年のことである。その時期は、主に貧困を理由として、東ヨーロッパ諸国から西ヨーロッパへのユダヤ人移民が増加していた頃と重なる⁸。当時、フランスでは、第一次世界大戦による人口減少に伴い、1927年に国籍法が改正され、移民の帰化が促進されていた⁹。サラ・コフマンを含めた6人の子どもたちは、皆、フランスで生まれ、同国の教育を受けた。ただし、両親は同化しなかった。そのため、一家は、ポーランド語かイディッシュ語を話し、また、ユダヤ教超正統派の戒律に倣った生活を送っていた。

コフマン一家の住まいは、パリ18区オールドネル通り6番地にあり、現在（2017年当時）も、建物自体は当時の姿のまま現存している。オールドネル通りの名は、将軍ミシェル・オールドネ（Micherl Ordener, 1755-1811）に由来する。コフマンは、自伝のタイトルの一部であるこの通りの名称を一家の生活様式に準え、将軍の名 Ordener をユダヤ教の ordre（「戒律」）と読み替えている。

1940年5月のドイツ軍侵攻により、フランスは敗北し、同年、6月22日、パリを含むフランス北部と東部はドイツの占領下となった。フランス政府は、南部のヴィシーへと移り、フィリップ・ペタン（Philippe PÉTAIN : 1856-1951）を国家首席とする「フランス国」État français が成立した。ヴィシー政権は、1940年7月22日、「1927年法」施行以来の帰化申請を見直し、15,000人のフランス国籍を無効にし、さらに、ナチス・ドイツの命令によらず、同年10月3日に可決した「ユダヤ人規定」Le statut des juifs に基づいて、「ユダヤ人」の市民権を剥奪した。

1942年7月16日-17日、「ヴェロドローム・ディヴェール事件」Rafle du Vélodrome d'hiver（略してヴェル・ディヴ事件 Rafle du Vél' d'Hiv）と呼ばれる、外国籍の「ユダヤ人」が大量に検挙された事件が起こった。3,000人のフランス警察が動員され、パリとパリ郊外で13,152人もユダヤ人が検挙された¹⁰。父ベレクが検挙されたのはこの一件によるものであった。パリ4区にあるショアー記念館 Mémorial de la Shoah Musée の資料室で入手した移送車リストの

⁸ cf. GRYNBERG, Anne. *La Shoah : L'impossible oubli*, Paris, Gallimard, 1995, p.16.

⁹ 渡辺千尋「両大戦間期フランスにおける国民の概念とその変容-1927年国籍法の改正を中心に-」『ヨーロッパ研究』、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、2007年、153頁参照。

¹⁰ cf. JOLY, Laurent, *Vichy dans la « solution finale »*. Histoire du commissariat général aux questions juives 1941-1944, Paris, Grasset, 2006., p.359.

写しによると、ベレクは、検挙後、パリ北東に位置するドランシー一時収容所に収容され、同年7月29日に、12番輸送車で、アウシュヴィッツへ輸送されていた¹¹。

第1部第2章 父の不在が意味するもの

第2章では、『オールドネル通り、ラバ通り』における父検挙の情景描写について、草稿と出版されたヴァージョンとを比較し、とくに問題視すべき削除痕を3点挙げ、これらの修正理由を推測するために、コフマンにとって父の不在が何を意味するのかを検討した。

同書第2章には、父が「逮捕」され、サラを含め6人の子どもたちが、路上に取り残される場面が描写されている。

あるギリシア悲劇の中で「オー、ポポイ、ポポイ、ポポイ」という有名な嘆きの言葉を初めて読んだとき、私は子どもの頃のかの情景を思い出さぬわけにはいかない。すなわち、父親に見捨てられた6人の子どもたちが、息を詰まらせながら、もう二度と彼には会えないのだと思って、「オー、パパ、パパ、パパ」と泣き叫ぶしかなかったという情景である。(KOFMAN, 1994a, pp.13-14. 下線部強調筆者)

上述のように、草稿には、重要と思われる相違点が3点あった。1点目、父が検挙された場面を単に「かの情景」(引用下線部)と表現しているが、草稿では、「絶対に悲劇的な絶望の場面」としていた点。2点目は、取り残された子どもたちの感情について、「父親に見捨てられた」(引用下線部)との文言が、「神々に見捨てられた」と表現していた点。3点目が最も重要かつ大きな違いであるが、父の検挙当時、まだ幼く、ギリシア悲劇を知らない頃、父とヘブライ語で口ずさんだユダヤ教聖典(『旧約聖書』)の詩編137編の1節「バビロン川のほとりに座り 私たちは泣いた シオンを思って…」を記していた点である。

次いで、これらの修正理由を推測するために、『オールドネル通り、ラバ通り』と、コフマンが1987年に父ベレク・コフマン、モーリス・ブランショ、ロベール・アンテルムに捧げた著書『窒息した言葉』との関連性に注目し、コフマンにとって、父の不在が何を意味するのかを探った。

戦後、コフマンは、収容所の生還者から父の最期を聞く。アウシュヴィッツへ移送後、ベレクは1年ほど生きて、安息日 Shabbat に労働を拒否したため、カポ〔囚人頭〕となったユダヤ人に鶴嘴で殴られ、生き埋めにされたのだと (cf. KOFMAN, 1994a, p.16.)。ユダヤ教の「安息日」は、週の土曜日にあたり、その日は一切の労働が禁止されている(十戒第4項)。「労働」は、楽園追放されたアダムへの罰であったが(『創世記』3章17節)、神は、週に1度、人間に休息を与えたのである。コフマンは、強制収容所での「労働」を『窒息した言葉』で、次のように規定している。「アウシュヴィッツでは労働はあらゆる意味で、終わりも、目的も、休息も、余暇も、始まりも、中断もない。労働は死の厳密な等価物である」¹²と。「労働」の拒否は、ベレクに肉体的死をもたらしたが、しかし、この「労働」が「死」と等価であるならば、

¹¹ Liste originale du convoi de déportation N°12 du 29-07-42, ARCHIVES DU MÉMORIAL DE LA SHOAH, 17, rue Geoffroy l'Asnier-75004 PARIS (Tél. 01 42 77 44 72-Fax 01 53 01 17 44), URL : http://192.168.16.27//ressources/32/Mms-1011005_M.jpg (accès le 25 Août 2017)

¹² KOFMAN, 1987a, p.41: 下線部強調引用者

それは「死」の拒否、「生」の肯定であったと理解しえよう。

『オールドネル通り、ラバ通り』草稿には、『窒息した言葉』の一節が引用されていたが、印刷されたヴァージョンでは削除されていた。引用されるはずだった箇所は、当書第4章からの次の一節（下線部）である。

父は安息日 Shabbat を祝福し、犠牲者と死刑執行人の双方のために神に祈りを捧げ、この無力さの限界と暴力の限界からなる状況において、権力の手が一切及ばない或る関係を築き直そうと望んだ。だがそのことは彼ら〔ナチス〕には耐え難かった。ひとりのユダヤ人、この寄生虫が、強制収容所においてさえ、神に絶望していないということは。（KOFMAN, 1987a, p.41：括弧内補足および下線部強調筆者）

コフマンは、父の最期の望みを自らの「神」との関係、「権力の手が一切及ばない或る関係」の再建であったと推測している。ここでいわれる「神」、あるいは「関係」は、モーリス・ブランショ（BLANCHOT, Maurice : 1907-2003）が『終わりなき対話』（*L'Entretien infini*, 1969）で行なっている「ユダヤ人であること」*l'être-juif* をめぐる議論を参照して規定されている。ブランショによれば、反ユダヤ主義は、ユダヤ人を排斥するだけでなく、歴史からも抹殺し、彼ら書いた書物、あらゆる痕跡を抹消するまで、徹底的な否認を続ける（cf., BLANCHOT, *L'Entretien infini*, p.190.）。しかし、こうした執拗な否認が「いかなる形式の権力でも凌駕できない、無限との関係 *le rapport avec l'infini*」（*ibid.*, pp.189-190）を逆説的に再肯定する、とブランショはいう。消し去りえないものが残るのである。「無限」、ヘブライ語でいうエン・ソフ אין סוף は、ユダヤ教神秘思想における「神」と等しい。ここでは人格神の性格は後退している。「無限との関係」は、ナチスをはじめ、あらゆる地上的権力の及ばない、人間世界から完全に隔絶された「崇高なもの」と、「ユダヤ人」との関係のことである。ブランショは続ける。仮に、「現前するあるひとりの男を殺したとしても、決して現前することのない空虚な現前であるかぎりの現前を侵害することはできない。ただ、現前を見えなくするということができない」（*ibid.*, p.190.）、と。鶴嘴の一撃が、あるひとりのユダヤ人の男、ベレク・コフマンを眼前から消し去ろうとも、彼が肯定していた「無限」にまで手をくぐらせない。ベレクの不在それ自体の現前が、まさに「無限」の現前を、「無限」との途方もない距離を示すのである。不在の現前をなきものにすることは不可能である。そのため、「無限との関係」を逆説的に「再肯定」することとなるのである。

コフマンは、こうしたブランショの議論を参照し、『窒息した言葉』において、ユダヤ人は「自己の歴史の中に、不気味さ、追放、外部といったものを常に保持することができた点で、無限との関係の寓意的な形象」¹³であると定義する。「他者」としてのユダヤ人の「寓意的形象」の対立項として現れるのは、ギリシア的な「他者」（「異邦人」）である。コフマンは、ブランショの『終わりなき対話』を参照しながら、ギリシア的な「他者」を「嘆願者」*suppliant* として説明する。「嘆願者」*suppliant* と訳されるギリシア語のヒケテース *ἡκέτης* (*hiketēs*) の本来的語義は、他所から「来たる者」*celui qui vient* であることから、「嘆願者と異邦人 *l'étranger* は同じことである」（BLANCHOT, *L'Entretien infini*, p.133）。ギリシアにおける「嘆願者」すな

¹³ KOFMAN, 1987a, p.14.

わち「異邦人」は、故郷に帰れば、「異邦人」ではない。全能なる神に見捨てられ、悲劇の只中にいたとしても、おのれが帰依する別の神、別の掟、自己の認識に開かれることになる別の新しい真実があり、またそれを誰か（コロス等）に話せる環境にある。しかし、ユダヤ人は地上のどこにいても「異邦人」である上に、「神」からも無限に隔たっているのである。

コフマンは、『オールドネル通り、ラバ通り』を出版した同年 1994 年に、反ユダヤ主義者のレッテルを貼られたニーチェ擁護のために『ユダヤ人たちの軽蔑』（未邦訳：*Le mépris des juifs*, 1994）を上梓している。この中の「ギリシア人に抗するユダヤ人」という章で、ニーチェが『喜ばしき知識』135 節で述べているユダヤ人とギリシア人の違いについて検討している。ニーチェによれば、ユダヤ人は、「罪」を発明した。ただし、この「罪」は、人間に対する「罪」ではなく、「至高存在」に対する「罪」である¹⁴。「神と人間は隔絶していて、対極のもの」と考えられていた。そのため、人類に対する毀損については、何ら「罪」を問えない¹⁵。他方、ギリシア人にとって、こうした「罪」なる概念は「お笑い草であり、苛立ちの元である」¹⁶。ギリシア人は、「罪」ではなく、「悲劇」を発明する。ニーチェは以下のように述べる。「ギリシア人たちは、犯罪に尊厳をまとわせ、それを同化するために、悲劇を考案した。悲劇という芸術にして快樂」¹⁷。

他方、ユダヤ人の発明である「罪」については、アドルノの『否定弁証法』で展開する「アウシュヴィッツのあとではまだ生きることができるかという問題」と関わる。アドルノによれば、アウシュヴィッツ以後、生き続けるためには、「冷酷さ」Kälte が必要となる。そのため、「殺戮を免れたものには、激烈な罪悪感がつきまとう。その報いとして彼は悪夢に襲われる」¹⁸と述べている。アドルノの説明に従えば、「冷酷さ」とは、「自己保存衝動」Drang der Selbsterhaltung (ADORNO, S.355) に眩惑された主体がとる傍観者の態度 die zuschauerhafte Haltung (ebd., S.354) のことである。「傍観者として距離を取り、自分を一段上に置く能力」(ebd.) は、非人間的にみえながら、実は、逆説的に近代の人間性を支える根本原理—「市民的 subjective 根本原理」—となってきたとアドルノは分析している。だが、アウシュヴィッツ以後、生き延びるための傍観者の生には、常に「これでいいのか」という罪悪感が意識的にしろ、無意識的に伴うことになるのだ。「悪夢」もまたコフマンのテキストの中のキーワードであるが、彼女もまた、自分の命を救うために「身代わり」になって、アウシュヴィッツで死んだ父に対する「罪悪感」を持っていたと考えられる。

第 1 部第 3 章 「赦しの不可能性」

第 3 章では、第 2 章での考察を踏まえて、父ベレクが検挙された描写をめぐる 3 つの修正が、なぜ行われたのかを検討した。

第 1 の修正。草稿における父検挙の情景の「この絶対的な悲劇的な絶望の場面」cette scène de désespoir absolu, tragique を削除した理由は、「ユダヤ的なもの」と「ギリシア的」なものの相

¹⁴ フリードリヒ・ニーチェ、村井則夫訳『喜ばしき知識』、河出文庫、2012 年、225-226 頁参照。

¹⁵ 同上参照。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 同上、226 頁。

¹⁸ ADORNO, 1970., S. 353.f. 下線部強調引用者。

違から理解しうる。なぜなら、超越と関係する「絶対的な」absolu という極めてユダヤ的形容と、他方、「悲劇的な」tragique というギリシア的形容は両立しえないからである。ニーチェがいうように、ギリシア人の考案した「悲劇」が、「犯罪に尊厳をまとわせ、それを同化するため」のものであれば、アウシュヴィッツを「悲劇」と呼ぶことに躊躇せざるをえない。なぜなら、非当事者が、フォボス φόβος（恐怖）とエレオス έλεος（憐れみ）を抱きつつ鑑賞する「悲劇」、つまり「快樂」を生む装置-アリストテレスにおけるカタルシς κάθαρσις 効果（精神浄化）-へとアウシュヴィッツの出来事が還元される危険が生じるからである。コフマンの修正には、この危険を避ける意図があったと思われる。

第2の修正。父が検挙された日の子どもたちの感情をコフマンは、草稿において、「神々に見捨てられた」と表現したが、出版の段階で「父に見捨てられた」と修正した。この修正もまた、「ギリシア的なもの」と「ユダヤ的なもの」の差異によって理解しうる。複数形の「神々」は古代ギリシア悲劇の神々が念頭に置かれている。草稿段階で、コフマンは、自分の運命を『アガ멤ノン』のカッサンドラの不幸と一致させていた。しかし、出版の段階で、この「神々」は悲劇の神々ではない、すなわち、アウシュヴィッツでの父の死は、ギリシア悲劇の枠内でとらえられる事象ではなく、さらには、ユダヤ神教の神でもない、私の父なのだということに気づいたのである。

では、「父に見捨てられた」と修正したのはなぜか。アウシュヴィッツで父を失った経験をコフマンは、『窒息した言葉』で、「私の絶対的なもの」「崇高なるもの」¹⁹と表現している。それは、彼女にとっての絶対的な「他者」である。見捨てられたという感情は、休息の祈りを奪われ、鶴嘴の一撃で生き埋めにされ、墓標すらも残さなかった、あるたったひとりの父ベレク・コフマンの不在の現前、その到達しえない無限の距離をコフマンが意識していることであると考えられる。

第3の修正点。コフマンは、バビロニアに対する捕囚民の悲しみだけではなく、復讐を吟じた詩篇 137 編の1節を引用していたが、それを削除した。これをどう解釈すべきか。コフマンは、「負債を返さぬ方法」²⁰を検討することはあっても、「赦し」については一度も口にしていない。この概念を考察したのは、むしろ、彼女の友デリダである。デリダは、ジャンケレヴィッチが「死の収容所で赦しは死んだ」と言ったのとは反対に、「赦しの歴史は、その反対に、赦されえぬものと共に始まるであろう」²¹とした。「赦しは、ただ赦しえぬものを赦す le pardon pardonne seulement l'impardonnable。[...] 赦しは不可能なものそのものとして自らを告げざるをえないのである。それは不可能なものをなすということではありえない」(DERRIDA, 2000, p.108)と述べている。コフマンにとって、父の命を奪ったナチスは「赦しえぬもの」であったはずだが、彼女は復讐心を示す詩の一節に斜線を引いた。「赦し」は「不可能なものそのものとして自らを告げざるをえない」(ibid.)というデリダの言葉を手掛かりにして考えるならば、コフマンが草稿に残した詩編 137 編 1 節の削除痕は、「復讐」の断念と「赦しの不可能性」の物言わぬ告白である、と解釈できまいか。コフマンとデリダをめぐる「赦し」の問題は、第3部で再度検討した。

¹⁹ KOFMAN, 1987a, p.16.

²⁰ cf., KOFMAN, 1991a.

²¹ ibid., p.113.

第2部 母の喪

コフマンは、母の死に際しても、「喪」の作業を行ったのであろうか。生存する親族-コフマンの姉アネット-へのイザベル・ユレルヌによる聞き取りによると、実母フィネサ・コフマンの没年は1974年であったという。しかし、『オールドネル通り、ラバ通り』の中には、実母の名、死についての感情的な描写も、埋葬の様子など、具体的なことは何も記されてはいない。草稿の中にもそうした記述を見つけることはできなかった。

こうした実母に対するコフマンの態度について、フランソワーズ・コラン (COLLIN, Françoise : 1928-2012) は、生き延びることを選んだ彼女の「残酷さ」を強調し、そこに娘による「母殺し」を見る²²。たしかに、その読みは正当であると思われる。しかし、それでもなおコフマンは、実母の死に「悲しみ」を感じ、喪の作業を行っているのではないかと仮定し、『オールドネル通り、ラバ通り』の中で、唯一、実母フィネサの死に触れている部分-「母が亡くなったとき、この葉書を探したが見つからなかった」(KOFMAN, 1994a, p.16.)-を取り上げ、コフマンにおける母への喪のあり方を検討する。

第2部第1章 母との蜜月

1942年7月16日ヴェル・ディヴ事件以降、ユダヤ人の検挙はますます頻繁に行われるようになり、コフマンは連行される恐れがあるため、ついに通学できなくなった。

コフマンの母は、42年7月から43年2月の間、子どもたちの避難先探しに奔走した。6人の子どもたちは、検挙を免れるためにユダヤ人であることを隠して、避難することになった。しかし、コフマンのみ、食事を拒み-とりわけ豚肉を-どこの避難先にも馴染めなかった。2、3歳の頃、「ほんの一瞬母を見失っただけで」²³大声で泣き出した思い出を語っている。「私が本当に恐れたのは、母と離ればなれになることだった」(KOFMAN, 1994a, p.33.)。こうした母子分離不安は3歳頃までの幼児にはよく見られるが、特殊な環境下に置かれた8~9歳頃の子どもにも見られる傾向である。こうして、パリで実母と二人で隠れ暮らすことになったが、わずかな間だったとはいえ、実母との二人きりで過ごせる時間は至福のひとつときであったようだ (ibid., p.34.)。「一人っ子になる夢」を実現したコフマンであったが、この母娘癒着の蜜月は終わりを迎えた。

1943年2月9日の夜から10日かけて起こった、パリで実施された検挙事件の中ではヴェルドローム・ディヴェール事件に次いで、2番目に大きい事件があった。このときの出来事について、コフマンは『オールドネル通り、ラバ通り』(1994a)だけでなく、『いかに切り抜けるか?』(1983a)の補論「悪夢-中世研究の余白に」でも語っている。

『オールドネル通り、ラバ通り』第IX章の記述は次の通りである。

《それ》« Cela »は間もなくやってきた。

43年2月の9日(?)、夜8時のことだった。私たちは野菜のブイヨン飲んでいて。誰かがドアをノックした。一人の男が入ってきた。「すぐ逃げなさい。あなた

²² F. コラン「ほどよい食事は無理」棚沢直子訳『サラコフマン讃』、30-36頁参照。

²³ KOFMAN, 1994a, p.33.

と 6 人のお子さんたちは、今晚の分のリストに載っています」と言って、立ち去った。

それ以来、二度と彼に会うことはなかった。(KOFMAN, 1994a, pp.38-39.)

続いて『いかに切り抜けるか?』補論における記述は次の通りである。

1943 年 2 月-ほぼ 40 年前-おそらく火曜日-夜 8 時 [...] のことだった。ドイツ軍司令部 Komandantur の男が [...] 母と私に警告しに来た [...] (KOFMAN, 1983a, pp.109-110.)

コフマンと母に警告しにきたのは、なんらかの良心を残していたドイツ軍司令部の男だった。今晚、突然行っても泊めてくれる人のところへすぐに逃げなければならない。誰か。母は、「ラバ通りの奥さん」のことをとっさに思いついた。挨拶を交わす程度の仲だったが、母は「あの人がこそ本当の子ども好きだ」「あの人は私たちを外に放り出したりしないよ!」(1994a, p.40.)と、直観的に「ラバ通りの奥さん」の家を避難先を選んだのだった。

突然訪ねてきた二人を「ラバ通りの奥さん」は、快く受け入れた。コフマンは、「奥さん」を一目見たときから、その優しさと美しさに魅了された。翌朝、サラと母が、オールドネル通りに戻ると、自宅のドアには「封印」がしてあった。二人は、結局、ラバ通りの奥さんのもとへ戻ることになる。こうして、少女サラは、一つ屋根の下で、二人の《母》と暮らすこととなった。

第 2 部第 2 章 2 人の母との不可能な共生

ユダヤ人を匿った者も銃殺刑になると脅されていた時代に、「ラバ通りの奥さん」は戦争が終わるまで、「パリの真ん中」でコフマンと実母フィネサの命を守った。彼女はサラを「シュザンヌ」というカトリックの洗礼名で呼ぶことにし、自分のことをメメ Mémé と呼ばせた。メメは、夫を亡くし、息子が結婚後家を出て、姉を看取ってからは一人で生活をしており、小さな印刷屋を経営していた。ラバ通りのメメの自宅に潜伏することで、逆説的に、コフマンは、それまでの戒律厳守の閉鎖的世界から「向こう側」Là-bas へ出ることになる。

メメとの生活で、コフマンの生活は一変した。メメは、コフマンを抱きしめ、優しさを示した。超正統派ユダヤ教の家庭には、キスやハグといった親密な愛情表現をする習慣はなかった。当初、コフマンは実母が危険を冒して探してくる「清浄な」食べ物(カシェール)を食べていた。しかし、まもなくして、メメは、ユダヤ式の食生活が健康によくないと断言し、コフマンの世話一切を引き受けた。

コフマンは、メメに魅惑されていった。「母の日」の贈り物は、サラにとって、二人の《母》への態度を決定的に意識させる出来事であった。二人の母のために贈物を買ったコフマンは、プレゼントと 2 枚の絵はがきを買った。2 枚のうちきれいだと思ったほうをメメに選んだ。その瞬間、「どちらが好きかをはっきりさせてしまったのだ」(KOFMAN, 1994a, p.55.)と告白している。

コフマンの近親相関的同性愛といってもよいメメへの感情は、胸のはだけたパジャマ姿で歩き回るメメに度肝を抜かれる実母を横目に、その乳房に魅了されたという回想からも伺える

(cf., *ibid.*, pp.65-66.)。ユダヤ教正統派の女性は、現在でも肌の露出のある服を着て歩くことを禁じられている。実母にとって、メメの振る舞いは、受け入れがたいものであった。食事に関しても、コフマンは、すっかりユダヤ教の宗礼に則った生活を忘れてしまった。血のしたたるビフテキが好物になり（ユダヤ教では肉を食べる前に血を抜く必要がある）、父のことも考えることがなくなり、イディッシュ語も発音ができなくなり、戦争が終わるのを恐えるようにさえなっていた(*ibid.*, p.67)。

戦争中、実母は無力だった。あれだけ自分のことを慕っていた娘が、他の女性に執心している。「母は黙って苦しみに耐えていた」(*ibid.*)。フランソワーズ・コランは、少女サラの実母に対する「残酷さ」、ある種の「母殺し」をこの情景に見ている²⁴。

1944年、パリの解放。実母は、自分たちの命を救ったメメに対して、憎しみと軽蔑しか持てなくなっていた。コフマンをメメから引き離し、ホテル暮らしを始めた。実母はメメとの面会を一日一時間だけ許可したが、帰りが少しでも遅くなると、サラをムチで打った。さらに、実母は、命の恩人であるメメを裁判に訴えた。メメが、サラを「玩ぼう」とし、実母を虐待したと告発したのである。これに対して、サラは、鞭打たれた青あざだらけの尻を傍聴人にみせて同情をひき、また実母の証人として出廷したユダヤ人の友人も、立場を逆転させ、実母がサラを虐待していたと証言した。結果、裁判所は、サラの親権をメメに委ねるという判決をくだした。

裁判後、サラの気持ちは複雑だった。「私は何かとても奇妙な不快感を覚えた。なぜかしら、私には勝ち誇った感じも、完全な幸福も、まったくの安心感もなかった。」(KOFMAN, 1994a., p.71)。ラバ通りのメメのアパルトマンに戻ると、2人の男を連れた母が階段の踊り場にいた。男たちはメメからサラを乱暴に取り上げ、母は彼女を叩きながら、イディッシュ語で叫んだ。「お前の母親は私だよ！私が母親なんだよ！裁判所の決定が何だ。お前は私のものなんだ！」(*ibid.*) コフマンはこのときの情景を次のように描写している。「私はもがき、泣き叫んだ。でも心の底では、ほっとしていた」(*ibid.*)と。

コフマンは、ナチ占領下のパリで、ラバ通り（「向こう側」）で暮らした一年半の間に、二つの文化—ユダヤ教文化とフランス・カトリック文化—をそれぞれ担うかにみえる「二人の母」に心理的に引き裂かれることになった。実母に対しても、メメに対しても、それぞれに両価的な感情を抱く心理的葛藤を抱えることになったのである。

第2部第3章 融合する二人の《母》と不在の《父》 - レオナルドとサラ

パリ解放後、サラの親権をめぐる二人の母の戦い—「裁判」—について書かれた章に続く13章は、「レオナルドの二人の母」と題されている。コフマンは、ここで、処女作『芸術の幼年期—フロイト美学の一解釈』(*L'enfance de l'art. Une interprétation de l'esthétique freudienne : 1970/1975/1985*)の表紙にレオナルド・ダ・ヴィンチが制作した『聖アンナと聖母子』²⁵の下絵²⁶を選んだと述べている。ついで、この絵画に関するフロイトのテキスト「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」(*Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci, 1910* : 以下、

²⁴ F. コラン「ほどよい食事は無理」棚沢直子訳『サラコフマン讃』、34頁。

²⁵ *La Vierge, l'Enfant Jésus et sainte Anne*, 1508年頃, パリ・ルーヴル美術館所蔵。

²⁶ *La Vierge, l'Enfant Jésus avec sainte Anne et saint Jean-Baptiste ou The Burlington House Carton*, 1499-1500年頃, ロンドン・ナショナルギャラリー所蔵。

「レオナルド論」と表記)からの引用で、当章を終えている。レオナルド・ダ・ヴィンチもまた、コフマンと同様、その生い立ちを辿ると、父の不在の時期があり、彼の実母カテリーナと継母ドンナ・アルビエラという二人の母があった。コフマンは、フロイトによる「レオナルド論」の読解を通じて、自身の幼年期をレオナルドのそれに重ねていたことを明かしている。

「メメ」*mémé* は、フランス語で祖母の愛称「おばあちゃん」という意味ではあるが、親権をめぐる裁判の場面との対応を考慮に入れると、この場合、メメは、レオナルドの継母ドンナ・アルビエラに対応する(絵画では「マリア」として描かれる)。そして、息子を奪った彼女に「嫉妬の念」を抱くカタリーナが、コフマンの実母と対応するといえよう(絵画では「聖アンナ」として描かれる)。

しかし、コフマンにおいて、二人の《母》は、明確に分離され、いかなる状況でも、メメが「マリア」の、実母が「聖アンナ」の形象をそれぞれ担うわけでもない。コフマンが『芸術の幼年期』の表紙に、あえて『聖アンナと聖母子』の下絵のほうを選んだのには何ごとかの意味があろう。下絵に描かれるアンナとマリアが、その境界が曖昧で、夢の中でのように互いに溶け合ってみえることから、フロイトは、「レオナルド論」に1919年に付した註に、「幼年期の二人の母親は、この芸術家にとってはひとつの形姿に合流してよい存在」²⁷であると述べている。コフマンにおいても、メメと実母、二人の母への両価的感情が、両者を融合させてしまったのではないか。この心的現象の分析は、第3部に譲った。

第2部第4章 母のための喪の作業

戦後、実母はコフマンを鞭打ち、勉学の妨害をした。このため、コフマンにとって、実母は憎むべき《悪い母》となり、このことが彼女をひどく悩ませた。コフマンの幼年期の記憶の中で、実母は、しばしば恐怖のイメージと結びついている。コフマンは、オールドネル通りの自宅にいたころ、実母がしつけと称して、「暗い部屋 *une chambre noire* に閉じ込め、《マレデウィッチャレ》*Maredewitchale* が出るぞと脅した」(KOFMAN,1994a,pp.85-86)というエピソードを紹介している。この思い出が、著書『カメラ・オブスクラ(暗箱)』(1973)を書かせたことが告白されている(ibid.p.85.)。精神分析の臨床の現場で、部屋を患者の精神内界とし、家を人の身体の延長として捉えることがあるが、コフマンは「暗い部屋」を「母の身体」の隠喩とみなしているといえる。「マレデウィッチャレ」*Maredewitchale* に付された註には、この語の接頭辞となっている“*mar*”が“*mer*”という西洋語根に由来していることが指摘されている(ibid.p.86)。さらにこの語根“*mer*”が、「死を、より正確に言えば、咀嚼ないし窒息によって起こるゆっくりとした死を喚起するあらゆる種類の語を形づくるものである」(ibid.)と説明し²⁸、内的対象としての《母》が、「死」、「不可避の不幸」、幼年期のユダヤ人検挙の「悪夢」のイメージと、完全に結びついていることを示唆している。

『オールドネル通り、ラバ通り』には、たった一箇所のみ、母の死に触れられたところがある。それは次の一節である。

²⁷ 『フロイト全集』第11巻、69頁/GW-VIII,S.186.

²⁸ コフマンは、“*mar*”について、論証的テクスト『いかにして切り抜けるか?』(1983a)に付した補論「悪夢—中世研究の余白に」«*cauchemar en marge des études médiévales*»において、ベルナルド・セルキリーニ(SERQUIGRINI, Bernard:1947-)の著書『中世のことば』(*La parole médiévale*, 1981)を参照しながら、より詳しく述べている。

母が亡くなったとき、この葉書を探したが見つからなかった。何度も繰り返し読んだものであったし、今度は私が持っていたいと思ったのだ。(KOFMAN, 1994a, p.16.)

「この葉書」とは、父ベレクが、ドランシー一時収容所から送った葉書である。収容所からは、イディッシュ語でもポーランド語でも書くことが許されず、父が口述したことを誰かがフランス語で書いた葉書であった。それでも、この「葉書」は、コフマンにとっては、父の「生の最後の証し」(KOFMAN, 1994a, p.15.)であった。彼女は、母の死に乘じ、今度は、その葉書を自分の手元に置いておきたいと考え、それを母の遺品の中に探した。しかし、この葉書を見つけることはできなかった。

あたかも、もう一度、あらためて父を失ったようだった。もう何も残ってはいなかった。彼の手 *sa main* で書かれさえしなかったそのたった一枚の葉書すら。(ibid.)

こうしたことから、コフマンは、実母の死には無関心であり、彼女のハンドバッグの中-いわば《母》の胎内-に探しているものは、やはり《父》のようにみえる。自伝の中に表面的に読み取れるのは、確かに、こうしたコフマンの実母への冷淡さあるいは憎悪かもしれない。

葉書を紛失したとしても、万年筆が「父の遺品」として残されているのではないか。「葉書」について書いているとき、コフマンは「万年筆」のことを忘れているのだろうか、と読者にはこれらの逸話が、一見、矛盾しているように見える。

コフマンの『窒息した言葉』の英語版翻訳者であるマドレーヌ・ドビー (DOBIE, Madeleine : 1966-) は、その序文の中で、コフマンのテキスト内に散見する矛盾を指摘している。彼女は、コフマンのこうした「誤り」 *mistake* は、自伝的テーマをめぐる記憶の混乱のために生じたのかもしれないため、訳註で可能な限り適切に「正していく」 *correct* と述べている²⁹。これに対して、キングストン大学 (ロンドン) およびデポール大学 (シカゴ) の哲学教授ティナ・シャンター (CHANTER, Tina : 生年不明) は、『窒息した言葉』ではなく、『オールドネル通り、ラバ通り』での話ではあるが、コフマンの自伝的テキストに現れる矛盾は、果たして正すべき「誤り」なのかと問う³⁰。むしろ、一見「誤り」と見える矛盾が、コフマン読解においては重要なのである。それをあえて正そうとするならば、コフマンのテキストに内在する「真実」を隠蔽する危険がある。

シャンターは、コフマンの無意識の働きに注目して解釈する³¹。コフマンは、「万年筆」を忘却しているわけではない。

万年筆は彼女に書かせている。父の死のために、彼女は書かなければならない。[...]

²⁹ DOBIE, Madeleine. The foreword for *Smothered Words* of KOFMAN, Sarah (1987c). Trans. DOBIE, Madeleine, Evanston, IL: Northwestern University Press, 1998, xxiv-xxv.

³⁰ cf. TINA, Chanter. « Playing with Fire : Kofman and Freud on Being Feminist, Jewish, and Homosexual » (chapter 6), in *Sarah Kofman's corpus*, CHANTER, Tina and ARMITT, de Pleshette (ed.), San Bernardino, CA, State University of New York Press, 2016, p99.

³¹ cf. *ibid.*

葉書は、いまや災いの前兆であったことが明らかとされた。それは、彼女の父の手によって書かれることは許されず、別の人間の手握られたペンによって書かれた葉書であるが、それはどこかへ行ってしまった。万年筆は、その〔書くという〕機能を奪われ、単なる《手前存在》present-at-hand³²にすぎず、もはや使われない。だから、コフマンは父の代わりに書かなければならないのだ。そして、書くうちに、彼女の書いたことは次第に喪の作業となるのだ。おそらく、その喪のあとで、彼女は〔万年筆を〕手放すことができただろう。

(CHANTER, 2016, p.99 : [] 内補足、引用者)

シャンターが、もう「書く」という機能を果たさなくなった、つまり壊れて使えなくなった父ベレクの万年筆を、ハイデガー用語を使って「手前存在」present-at-hand/Vorhandenseinであると解釈したことは、興味深い。この語は、『存在と時間』(Sein und Zeit, 1927)に登場する語である。Vorhandenseinは、ドイツ語の前置詞 vor (前に)と Handen (Hand「手」)からなるハイデガーの造語である。日本語訳はさまざまであるが、本論は「手」という語を入れた「手前存在」という訳を採用する。ハイデガーは、この語を従来の伝統的形而上学において、自明のものとして措定される「実体」や「精神」といった語が表してきた「存在」Seinの意味で用いている。厳密には「人間」-ハイデガーのいう「現存在」Dasein-以外の存在者の「存在」を表す範疇概念である。要するに、眼前にあるが、手が届かず触れない美術館の展示物のように、その物に備わる機能が、使用されないものである。これに対立する語が、Zuhandenseinであり、「用具存在」「手もとにあること」「手許存在」と訳される語で、手で掴め、実際にその物が備える機能を人間が使うことのできる諸物(「人間」=「現存在」Dasein以外の存在者)を表す範疇概念である。ハイデガーは、伝統的形而上学においては、「手許存在は、手前存在を基礎としてのみ『与えられている』」³³とされてきたことを批判した。むしろ、「手許存在」のような身近な諸存在者の理解を通過してこそ、内世界現象の認識が可能であり、「存在」(「手前存在」を含む)の開発も可能となってくるという³⁴。

コフマンはハイデガーが嫌いであった。彼がナチスを支持したというのがその大きな理由である³⁵。シャンターが「万年筆」を敢えて「手前存在」と呼んだのは、彼女のこうしたハイデガー嫌いを知ってのここのように思われる。シャンターの解釈は、コフマンの「万年筆」に深い意味を与えてくれる。というのも、ハイデガーに言わせれば、役立たずの「手前存在」である「万年筆」は、まさに、アウシュヴィッツで、労働を拒否し、ナチスにとっては役立たずとなり、カポに殺された父ベレクの「不在の現前」を表象していると思われるからだ。コフマンの仕事机に置いてある、もう誰の手にも握られない「万年筆」は、彼女にとってのみ、真に「無限」との、「崇高」との関係を持っている。おまけに「書け、書け」と命令もしてくるのだ。この「手前存在」は、全く静かではないのである。

とはいえ、シャンターの説明は、「葉書」と「万年筆」の逸話が、矛盾しながらも共存できるという十分な正当化にはなっていない。したがって、「葉書」と「万年筆」が意味するところ

³² ハイデガーの Vorhandensein の英訳。

³³ HEIDEGGER, *Sein und Zeit*, 1977, S.72.

³⁴ vgl., ebd., S.71.

³⁵ cf. KOFMAN, 1993b, pp.16-17.

るをもう少し掘り下げる必要がある。

コフマンが「万年筆」を忘却していない証拠は、『オールドネル通り、ラバ通り』のテキスト生成の現場にある。コフマンは、手書き原稿1部、タイプ打ち原稿5部、印刷所によるゲラ1部を経て、公表に至っているのである。幾度とない修正のチャンスがありながら、それをしなかったのは、コフマンにとって矛盾がないからである。

さらに、ドビーもシャンターも、両者を「父の遺品」とみなしているが、果たしてそうなのかと、問うことができる。「葉書」と「万年筆」は、コフマンにおいて、同じ「父の遺品」ではないのではないか。「万年筆」は、父が検挙される前に、使っていたものであり、実母が亡くなる前に、「父の遺品」が入っていた彼女のバッグから盗んだものである。一方、「葉書」は、父が検挙後の「生の最後の証し」として届いたものであり、実母が亡くなった後、彼女のバッグの中に探していたものである。さらに、「父の遺品」などが入っている母のバッグは、この時点では、もはや母の遺品である。このように考えれば、彼女にとって、「葉書」と「万年筆」は全く別のものだと考えることができる。

あらためて、「葉書」の紛失に関する一節を読んでみよう。「あたかも、もう一度、あらためて父を失ったようだった」(KOFMAN,1994a,p.16)。そのように感じたのは、父ベレクの「生の最後の証し」が紛失したためだけではなく、同時にまた、その中に《父》を探していたところの母の身体を失ったからだといえないだろうか。

「あらためて父を失った」という嘆きは、実母の死のための嘆きといえまいか。もちろん、実母との関係は、これまで見て来たように、大変難しいものであったのも事実である。しかし、パートナーのキリトソスの証言によると、他の兄弟姉妹たちは実母の住むパリを出たが、コフマンだけはパリに留まったという³⁶。キリトソスは、コフマンが、決して母から満足を得ない子どものポジションにあったと分析している³⁷。こうした実母に対する両価的感情は、メメと実母の裁判劇の後に、コフマンが実母に抱いた罪悪感と安堵感にも現れている。

このように理解すると、「万年筆」からの「書け」との命令は、果たして純粋に《父》からだけの命令なのか、と改めて問わざるを得ない。イディッシュ語あるいはポーランド語でしか話ることができなかった父のためにだけでなく、同時に、実母の死以降は、実母のためにも、フランス語で書いていたといえないだろうか。仮に、テキストの中で、実母については、多くを語らずとも、彼女は、無意識的にせよ、意識的にせよ、実母のためにも「喪」の作業を行っていると解釈しうる。コフマンは、実母に対して、ただ単に「残酷」だったというわけではない。

「万年筆」が、実母のバッグから勝手に持ち出された物である以上、おそらく何らかの母への「罪悪感」も呼び起こしていたはずである。メラニー・クラインによれば、幼児に「罪悪感」を引き起こすのは、《母》への攻撃の後である。「妄想-分裂ポジション」にある幼児は、赤ちゃんやペニスを探しながら、《悪い母》の子宮を空っぽにしてやろうと目論む。しかし、「抑うつポジション」に移行し、全人格的に《母》を認識すると、幼児は、かつての《母》への攻撃を悔やみ、「罪悪感」を感じるようになる。コフマンの場合、《母》への「罪悪感」は、検挙さ

³⁶ cf. FEYERTAG, Karoline. *Interview avec Alexandre Kyritsos* (le 29 juin 2017),

URL : feyertag.Kling.org/data/interviews_Kyritsos.pdf (accès le 14 juin 2017 à 5h22)

³⁷ cf., *ibid.*

れた父への「罪悪感」と融合する。父と母は、区別されながらも、「両親」として融合しもする。《父》について語りながら、《母》のことを語り、またその逆であることもある。こうしたことが、まるで夢の中でのようにエクリチュールの中で起こりうるのである。

第3部 メメの喪

『オールドネル通り、ラバ通り』は、メメの死によって終わる。

彼女は最近 *récemment*、サーブルの養護施設で亡くなった。[...] 私は彼女の葬儀には行けなかった。しかし、神父が彼女の墓に手向けた言葉は知っている。この人は戦争の続く間、ユダヤの小さな女の子を救った人であった、と (KOFMAN, 1994a, p.99.)

先行研究では、こうした記述から、メメに対してもコフマンは冷淡な態度を取ったと解釈されている。たとえば、フランソワーズ・コランは、この記述について次のように指摘している。「良い母 [メメのこと] もまたある種の無頓着さで捨てられるということだ。年取って、うるさがられ、次第に忘れ去られて、結局、彼女はひとりで死んでいく」³⁸と述べている。しかし、本論第3部では、コフマンは、メメに対しても「喪の作業」を行なったのではないかという仮説を立て、ヤド・ヴァシエム「世界ホロコースト記憶センター」が顕彰する「諸国民の中の正義の人」に、1987年にメメをノミネートした際の「証言」と、『オールドネル通り、ラバ通り』の内容との間にみられる矛盾を検討することを通じて、この仮説の証明を試みた。

ところで、コフマンの実母と同様、メメの固有名は、コフマンのいかなるテキストにも記されていない。メメの本名が、「クレール・シュミットル」(CHEMITRE, Claire) であるという確証を得られるのは、ヤド・ヴァシエムが公開している「諸国民の中の正義の人」*Juste parmi des nations* 部門の書類 (file n°M.31.2/4388) においてである³⁹。

ヤド・ヴァシエムが公開する資料によると、メメことクレール・シュミットルは、1987年に「諸国民の中の正義の人」の称号授与者としてノミネートされ、1989年に、委員会による厳正な調査後、この荣誉が授与されたとある。記録には、彼女の生年月日および没年月日、救助された人として「フィネサ・コフマン、サラ・コフマン」とあり、その「救助談」が記され

³⁸ F. コラン 「ほどよい食事は無理！」 棚沢直子訳 『サラコフマン讃』、35頁。

³⁹ **Comité Française pour Yad Vashem. L'histoire de CHEMITRE, Claire. (Année de nomination : 1989, Dossier n°4388),**

URL:<https://yadvashem-france.org/les-justes-parmi-les-nations/les-justes-de-france/dossier-4388/>

(2017年7月2日3時30分) ヤド・ヴァシエムは、ナチス・ドイツによって大量虐殺されたユダヤ人を追悼するために、1953年にイスラエルの国会決議に基づき設立された。この施設の名は、『イザヤ書』第56章5節「私 [神] は彼らのために、私の城と城壁の中に、決して消えることのない場所 (Yad) と名 (Vashem) を刻む」という一節に由来する。1960年から、ナチス・ドイツによる大迫害の時期に、危険を省みず、ユダヤ人たちを保護した非ユダヤ人を「諸国民の中の正義の人」*Les justes parmi les nations* として顕彰するようになった。顕彰された非ユダヤ人は、表彰され、「名誉の壁」に名が刻まれる。

ている。つまり、シュミットルの死に際して、誰かがノミネートをしたのである。その「誰か」とは、まさに、サラ・コフマンその人であった。今夏（2017年8月）訪れたショアー記念館 Mémorial de la Shoah Musée には、「名誉の壁」が設置されているが、「クレール・シュミットル」の名（ヴァシエム）は、そこに確かに刻まれていた。

驚かされたのは、この資料に記された「救助談」である。証言したのは、やはりコフマン自身であるが、「救助談」と『オールドネル通り、ラバ通り』に記されたこととの間に、明らかな齟齬があるのだ。この矛盾は、ひとつの「謎」として現れる。

第3部第1章 メメあるいは「諸国民の正義の人」－「自伝」と「救助談」の差異

第1章では、クレール・シュミットルに関するコフマンの「証言」をもとにした「救助談」と『オールドネル通り、ラバ通り』（および『いかに切り抜けるか』）での記述の矛盾を明らかにした。第1に、検挙の危険を告げに来たのは、ドイツ軍司令部の男であったと記されていたが、「救助談」では、シュミットルが、急いでオールドネル通りに住むコフマンとその母親に警告してきたことになっている⁴⁰。第2に、自伝の記述に従えば、シュミットルは、自発的にユダヤ人の親子を助けようとしていたわけではなかったが、「危険が迫っていることを知りさえしなかった人たちを救うために奔走した」⁴¹と「救助談」には記されている。しかし、メメの自宅が避難先に選ばれたのは、実母フィネサの思いつきであり、むしろ、子どもたちの命を救うためにあらゆる避難先を探して奔走していたのは、フィネサのほうである。第3に、学校へ通えなくなったコフマンのために、シュミットルが自宅で個別授業を行なったことが「救助談」には記されている⁴²。この記述に誤りはないが、詳細が省かれている。シュミットルによる個人指導は、コフマンがそれまで受けてきた両親の教育、すなわちユダヤ教からの引き離しを意味した。また、悪気はなかったとはいえ、彼女は、キリスト教ヨーロッパ社会で中世以来培われてきた「反ユダヤ主義的偏見」を脱していたわけではなかった。コフマンは『オールドネル通り、ラバ通り』に次のように書いている。「彼女（メメ）は私たちの身の安全は保証してくれたが、反ユダヤ主義的偏見を払拭したわけではなかった。彼女は私の鼻がユダヤ鼻だといって鼻筋の小さなこぶに触らせ、それが目印なのだと教えてくれた」（KOFMAN, 1994a, p.57）。

コフマンが、正統派ユダヤ教の戒律を遵守する生活から脱出し、「哲学者になる」ことは、フランス社会へのある種の「同化」を強いられることであり、同時に、無自覚な「偏見」にも、晒されることでもあった。しかし、「生きのびる」こと、「自分自身の道」を探すことを選んだ以上、コフマンは、もう、《父》の宗教、ユダヤ教には戻れない。しかし、それゆえに、宿命のように「ユダヤ性」がついてまわるのである。それは、多くの「同化したユダヤ人」たちが抱える葛藤である⁴³。

⁴⁰ cf., Comité Française pour Yad Vashem. L'histoire de CHEMITRE, Claire. (Année de nomination : 1989, Dossier n°4388), <https://yadvashem-france.org/les-justes-parmi-les-nations/les-justes-de-france/dossier-4388/> (2017年7月2日3時30分)

⁴¹ ibid.

⁴² ibid.

⁴³例えば、エマニュエル・レヴィナス（LÉVINAS, Emmanuel :1906-1995）は、1935年のニュルベルク法制定を背景に、次のように述べている。「ユダヤ人であるという悲壮な運命は宿命と

コフマンは、クレール・シュミットルを「諸国民の正義の人」にノミネートする際、この詳細、つまり彼女に反ユダヤ主義的臆見があったことについては一切、語らずに飲み込んだのである。

『オールドネル通り、ラバ通り』とヤド・ヴァシエムの「救助談」は、実際、どちらが「正しい」のか検証することは不可能に近い。しかし、「正しさ」よりは、彼女が意志していた、ある「真実」のほうが重要である。コフマンが綴る父と二人の母との思い出は、「ショアー」という出来事の何ごとかの「真実」を示さずにはいない。

第3部第2章 メメへの感謝

シュミットルに、無自覚な偏見があったとしても、彼女が、コフマンとその母フィネサの命を救ったことは紛れもない事実である。「救助談」において語られた、「自分の命を危険に晒してまで、クレール・シュミットルは、なんの報酬もなく、1944年8月にパリが解放されるまで、彼女たちを匿った」⁴⁴という事実は、『オールドネル通り、ラバ通り』の記述にも反さない。パリ解放後、経済的な困窮の中で、コフマンは、奨学金を得るために猛勉強しなければならなかったが、実母の妨害により、大変な苦勞を強いられていた。こうした状況の中、シュミットルは、コフマンが、学業を続けるために、影に日向に援助し続けたのである。

こうしてコフマンは、大学入学資格試験に成功し、完全給費生の資格を得て、高等師範学校準備クラスに進むことができた。シュミットルは、当時、フランス西部の大西洋に面したレ・サーブル・ドロヌ *Les Sables d'Olonne* に引っ越していたが、夏になると、コフマンは、彼女とヴァカンスを過ごした (cf., KOFMAN, 1994a, p.98)。

その後、成人とともに、コフマンとシュミットルの仲は疎遠となるが、フェイエルターグの著書の巻末には、レ・サーブル・ドロヌを訪れたコフマンが、老いたメメと共に写る一枚の写真が掲載されている⁴⁵。メメは優しい微笑を浮かべている。撮影年は1970年。この年は、哲学者としてのキャリアをスタートさせたコフマンが、初の著書『芸術の幼年期』(初版)を出版した年でもある。おそらく、コフマンは、この本をメメに届けにいったのではないだろうか。そう考える根拠は、映画監督シリ・ツール (TSUR, Shiri: 1968-) が、1995年に製作した映画『オールドネル通り、ラバ通り』 *Rue Ordener, rue Labat*⁴⁶において、

なった。われわれは逃れることはできない。ユダヤ人は抗いがたく自らのユダヤ性に釘付けされたのだ。[...] われわれはユダヤ教を捨て去ることができないということを想起させたのはヒトラーである」(LÉVINAS, E., « L'inspiration religieuse de l'alliance » (1935), *Cahier de l'Herne*, dirigé par CHALIER, C. et ABENSOUR, M., Paris, Herne, 1991., p.144.)

⁴⁴ Comité Française pour Yad Vashem. L'histoire de CHEMITRE, Claire. (Année de nomination : 1989, Dossier n°4388), <https://yadvashem-france.org/les-justes-parmi-les-nations/les-justes-de-france/dossier-4388/> (2017年7月2日3時30分)

⁴⁵ FEYERTAG, 2014, p.320.

⁴⁶ TSUR, Shiri(réalisateur). *Rue Ordener, rue Labat* (documentaire, 1995), KOFMAN, Sarah. *Rue Ordener, rue Labat* (d'après de livre), <https://www.youtube.com/watch?v=brKk-odePBI>, Paris,

コフマンがメメに献呈した『芸術の幼年期』初版（1970年）の献辞が紹介されていたからである。メメの遺品であるその書物の扉ページに、次のように書きつけられていた。「私のメメ あなたに命を救われたおかげで、こうして初めての本を書くことができました。キス サラ」⁴⁷

この献辞から、コフマンにとって、哲学すること、書くことは、生きることに等しいということが伝わってくる。この幼いサラの欲動、「生き延びたい」という^{エロース}生の欲動は、「哲学」の欲動に変わり、書物-コフマンはそれを「子ども」と呼ぶ-という形に「昇華」したのである。それを可能にしたのが、メメだったのである。コフマンは、初めての本を深い感謝と愛情を込めて、二人目の《母》、メメに贈呈したのである。

他方、「諸国民の正義の人」の榮譽はどうであろうか。コフマンのメメの感謝の贈り物と考えられはしないだろうか。メメの死の前後、ヤド・ヴァシエムにノミネートし、その恩に報いるために「諸国民の正義の人」の榮譽を彼女に、おそらく彼女の家族のためにも贈ろうとしたのではないだろうか。

第3部第3章 メメの神秘化-サラの贈与

『芸術の幼年期』の表紙の絵に選んだ、『聖アンナと聖母子』の下絵を今、一度思いおこそう。コフマンによる「諸国民の正義の人」へのノミネートの出来事に関していえば、「聖アンヌ」はメメだといえまいか。コフマンが「証言」した内容は、その自伝との差異から、「謎」に見える。レオナルドの描く聖アンヌの「微笑」も、フロイトにおいては、ひとつの「謎」であり、「不気味なもの」でもあった。なぜ、「謎」なのか。コフマンは、『芸術の幼年期』でそれを分析している。「いかなる生も、いろいろな表現を取りながら、女性性を拒否するがために謎なのである。[...] この女性性の拒否は、芸術家にとっては、父でありたい、そして、破れ目=穴を覆い隠すテキストを織り上げることによって母にペニスを贈りたいという彼の欲望によって表明されているのである」(KOFMAN,1985c,p.243.)。コフマンは、この説明の根拠として、フロイトの「終わりのある分析と終わりのない分析」(Die *eindliche und die unendliche Analyse* : 1933) から次の一節を引用している。「女性性の拒否 *Ablehnung der Weiblichkeit* はそれこそ、生物学的な事実、かの性別という大いなる謎の一部にはかならない」(『フロイト全集 21』 294 頁/GW-XVI, S.99.)。

コフマンは、『芸術の幼年期』において、「謎」を「女性性の拒否」*Ablehnung der Weiblichkeit* によって説明する際に、「終わりのある分析と終わりのない分析」で問題になっている「ペニス羨望」*Penisneid* とそれに対応する「男性的抗議」*Männlicher Protest* という語を一切使わない。『芸術の幼年期』で、コフマンは、フロイトをむしろ擁護しているから、敢えて悪名高いその語を使うのを控えたように見える。しかし、この「謎」についての解釈は、コフマンがフロイトにおける「女性性」理解の批判を行なっている『女の謎』(1980a)、および、フロイトに関する最後の著作『「大変なのは最初の一步なのです」-フロイトと思弁』(1991b)

Production Femis, (accès le 14 juillet 2017 à 7h23) この映画は、同名のコフマンの自伝の記述に基づいて、彼女の幼年期の思い出の場所を辿ってゆくという内容である。

⁴⁷ TSUR (1995,19 :27-19 :42)

の後半で行なっている「女の謎」の解釈と同じである。

フロイトの一般的理解では、「ペニス羨望」とは、「男性性器を所有したいという陽性欲求」⁴⁸である。女性は、ペニス羨望を「ペニスをそなえている男性を求める欲望」⁴⁹へと変え、つまり、受動的な性愛的地位を受け入れ、さらには、男の子を持つことにペニスの代替を求めなければ克服できない。患者に男性でありたいと願う「男性性欲望」⁵⁰がある限り、女性に対する精神分析はできないとフロイトは考えたのである。それに対応する「男性的抗議」とは、アルフレード・アドラー（ADLER, Alfred: 1870-1937）が提唱した語で、男性が「自分以外の男性に対して受動的ないし女性的態度をとることへの反抗」⁵¹のことである。フロイトは、このアドラーが社会的抑圧の結果とした「男性的抗議」を生物学的事実としての「去勢不安」と同義とした上で、「女性性の拒否」と言い換えているのである。

しかし、コフマンは、『女の謎』において、フロイトが女性の「去勢コンプレックス」としている「ペニス羨望」は、「女の謎」に対する「遮蔽回答」⁵²の一つ、「母なる自然への服従の裏返し」⁵³であると解釈する。つまり、「ペニス羨望」は「女性性の拒否」と同じく、男性に帰属する欲望である。「ペニス羨望」は、女性の欲望ではなく、むしろ息子の願望、深く愛しすぎた母に、ペニスを贈りたいという願望の女性への投影なのである。レオナルドが、聖アンナに「微笑」を送るように、フロイトは「母の性を隠蔽し、[...]、夢にまでみた母親との関係を覆い隠すための贖の答え」⁵⁴、すなわち「ペニス羨望」をヴェールとして母に送るとコフマンは解釈している。

つまり、《母》＝「自然」の過酷な側面、すなわち「現実・死・『根源的な差異』・それらの象徴である限りでの女性性」⁵⁵を拒否し、隠蔽するために、芸術家はヴェールを贈る。幼年期に、メメに対して、近親相姦的同性愛ともいえる感情を抱いていたコフマンは、「ペニス」を持ちたいなどと欲望したのではない。「ペニス」を贈りたかったのである。メメ、この深く愛した《母》が亡くなる際に、あたかも、レオナルドに同一化して、コフマンは、男の子が「ペニス」を贈るかのように、「存在しない微笑」、彼女の「子ども」に等しい書物を贈るかのように、「諸国民の正義の人」の栄誉をメメに贈ったのではないだろうか。それゆえ、こうしたメメの神秘化が「謎」に見えるのである。

第3部第4章 メメの脱神秘化-アナンケーとしての「女性性」の受け入れ

しかし、コフマンは、自らを「哲学者」とみなす以上は、こうした「^{イリュージョン}錯覚」をそれとして暴かなければならなかった。「錯覚」を暴くとは、オイディプスのように「謎」を解くということではない。それは、「女性性」を受け入れるということである。ただし、「女性性」の受け入れとは、「受動的態度」を受け入れることではない。「女性性」を単に「受動

⁴⁸ 「終わりのある分析と終わりのない分析」『フロイト全集 21』、291 頁/ GW-XVI,S.97.

⁴⁹ 同上/ ebd.

⁵⁰ 同上、292 頁/ ebd.

⁵¹ 同上/ ebd.

⁵² KOFMAN, 1980a, p.113.

⁵³ ibid.

⁵⁴ ibid., p.113.

⁵⁵ ibid., p.246.

性」と規定するとしたら、それは形而上学的身振りである。「女性性」は、「受動性」とは全く異なる。「女性性」とは、コフマンの定義に従えば、優しく、慈しみ深い、生を与える《良い母》としての「良い自然」だけでなく、「死」を与える《悪い母》、アナンケー（「必然性」）としての「自然」という側面も持つ、両価的なものである。「女性性」を受け入れるとは、《母》の両価性を受け入れることである。換言すれば、《良い母》という幻想のヴェールを剥ぐこと、その背後には何もないことを示す、《母》の脱神秘化である。

コフマンは、メメが、完璧に良くもなければ、悪くもないということを受け入れる必要があった。また同時に、第2部で示したように、実母も、ただ悪いだけの母ではなく、少なくとも子の命を守るために、彼女なりに奔走した《良い母》なのである。

コフマンが『オールドネル通り、ラバ通り』で、二人の《母》に対して行ったことは、《母》の脱神秘化である。《母》たちに関する詳細を書くことによって、コフマンは、二人の女性を、単に子どもである「サラ」の観点から、自己中心的に、良い《母》/悪い《母》と判断することをやめ、それぞれを《母》という役割から解放し、フィネサとクレールという、一人の女性、一人の人間として解放する、という意図があったとも考えられよう。

第3部第5章 「赦しの不可能性」と「笑い」

ヤド・ヴァシェムの資料によると、メメ、つまりシュミットルの没年月日は1987年12月1日であった。ここでもう一度、『オールドネル通り、ラバ通り』の最終節に戻ると、不可解なことが1点出てくる。「彼女はつい最近 récemment、サーブルの養護施設で亡くなった」（KOFMAN,1994a,p.99）という一文である。自伝が書かれたのは、1993年～1994年にかけてのことである。そこから遡って約6年前の出来事を果たして、人は「最近」というだろうか。

コフマンは、テキストが書かれた日付を変更することがあった。ジャン＝リュック・ナンシーによると、コフマンは「日付を書き換えることまでして最後をしめくくる」⁵⁶ことがあったという。「しめくくる」といっても、コフマンは、自分の書物に「結論」を与えず、いつも「最後の言葉」を冗談や誰かのテキストからの引用に委ねている。ナンシーが言っているのは、フロイト論『人はなぜ笑うのか—フロイトと機知』（1986a）の結論のことである。彼女は、この本をテオドール・ライク（REIK, Theodor : 1888-1969）が報告した機知を紹介しながら、次のように締めくくっている。

この本を終えようとしている今日、9月25日、ヨム・キップールの日には私は、テオドール・ライク⁵⁷が報告しているあのユダヤの話を、終わりに吹聴することを自らに禁じえない。「長年の敵であった二人のユダヤ人が、贖罪の祭りの日に、シナゴークで出会った。一人がもう一人に言った。「お前が俺に願うことを、俺はお前に願ってやるよ」。すると、二人目が即座にやり返す。「また始めよう

⁵⁶ 「クール、サラ！」 棚沢直子訳、『サラコフマン讃』、未知谷、2005年、48頁。

⁵⁷ テオドール・ライクはフロイトの弟子の一人で、『第三の耳で聴く—分析家の内的経験』（1948）*Listening With the Third Ear : The Inner Experience of a Psychoanalyst* の著者。分析家の傾聴をライクは「第三の耳で聴く」ことと表現している。

っていいのか?」。

したがって、結論の代わりに、最後の言葉を笑いに委ねよう。
(KOFMAN,1986a,p.198)

ナンシーによれば、コフマンが、実際に『人はなぜ笑うのか』の結論を書いていた「今日」とは、「9月25日」ではなかった。コフマンが、その年の「ヨム・キップール」-大贖罪の日-に日付の変更をしたのは、翌年の1987年に出版予定の『窒息した言葉』を予兆したかったからであるとナンシーは推測している⁵⁸。コフマンが、父ベレクの最期を生還者から聞いたのは、ある年の「ヨム・キップール」すなわち「大贖罪」Le Grand Pardon を祝うシナゴグであった。そして、父の死について語ったのが、『窒息した言葉』なのである。

テオドール・ライクが紹介した「機知」を取って説明すればこういうことである。「大贖罪の日」le Grand Pardon にすら、敵対するこの二人のユダヤ人は相手に「赦し」pardon を与える身振りをしながら、内心では憎しみの感情を新たにし、終わりの見えない闘争を再び始めようとする。「赦し」の見かけの背後の憎悪、復讐の連鎖を予感させるが、同時に、互いに「赦せない」ということを表明するこの二人のユダヤ人の間には、笑いとともに対話が始まる予感がある。「また始めようっていいのか?」と男が答えたあと、もう一人は、「なんだお前も赦さないのか。俺も赦さないぞ」と言い返ししながら、おそらく、二人の大笑いがあるのである。

コフマンは、1986年1月1日付で『ひとはなぜ笑うのか?フロイトと機知』をデリダに献呈している。そこに付された献辞をデリダは、彼女に捧げた弔辞で紹介している。

ジャックとマルグリットに。かつてわたしたちがいつかまた始めるという期待を抱いて食卓で吹聴していたユダヤの良き小話の思い出に.....。⁵⁹

この「ユダヤの良き小話」というのが、まさに上記の小話のことである。デリダは続ける。

このユダヤの小話は、[...] われわれはおそらく食卓で語り合っていたはずですし、われわれは一致してこの話をおもしろいと思ったばかりか、赦しと呼ばれる記憶のこの処置 [=治療] をこの話が扱っているまさにその箇所、この話は記憶すべきだ、忘れがたいと思ったはず。《...》なるほど「笑い」話ではありますが、この話のいったいなにがわれわれを笑わせ、笑わせ嘆かせ、涙や不安をとおして笑わせるのでしょうか? [...] わたしは、思い切ってこう言うことにします。[...] 二人のユダヤ人が試練とし、われわれを笑わせるのは、赦しの根本的な不可能性であると。[...] 彼女[サラ]は赦しの不可能性、その根本的不可能性を試練とするひとでもあるのです。⁶⁰

⁵⁸ 「クール、サラ!」 棚沢直子訳、『サラコフマン讃』、未知谷、2005年、48頁参照。

⁵⁹ 「(無題)」、芝崎和美訳、『サラコフマン讃』、未知谷、2005年、243頁。

⁶⁰ 同上、245頁-246頁。

『オールドネル通り、ラバ通り』の草稿において、父ベレクが検挙されたシーンから、コフマンが、詩編 137 編の復讐の詩を削除したことを思いおこそう（本論第 1 部参照）。コフマンは、父ベレクの死によって、「赦しの不可能性、その根本的不可能性を試練するひと」でありながら、復讐を放棄したのである。そして、その「不可能性」を不安と罪悪感の中で嘆き、また、友と吹聴した「機知」によって、笑おうともしたのだ。

書く主体の日付を「最近」と書き換えることによって、コフマンは、物語の終わりをメメが死んだ 1987 年に遡らせる。こうして、メメの死が導きの糸となり、二人の《母》を語った『オールドネル通り、ラバ通り』は、父の死について語った『窒息した言葉』に接続されるのである。父、実母、メメの 3 人は、いわば、「死」を介して、「ヨム・キップール」この大贖罪の日 *le Grand Pardon* に出会う。そして、今度は、「ヨム・キップール」という語が、読者の記憶を『人はなぜ笑うのか』の最後で語られた「機知」へと導くのである。「構築から構築へ、異本から異本へ、解釈から解釈へと」（KOFMAN,1985a,p.141）、コフマンのテキストは、書かれるべき「それ」をめぐる。まるで『ゾハール』のようである。日付の書き換えを示す「最近」というこの語は、『オールドネル通り、ラバ通り』の結論に秘められた、笑いを誘う「機知」なのだ。

結語

以上の考察を経て、『オールドネル通り、ラバ通り』冒頭で述べた「それ」が、「書くこと」への衝迫を引き起こす幼年期の欲動の蠢きであると解釈しうる。ファシズムの時代に、自らの命の危険を顧みず、それぞれの仕方で、子どもの命を救った 3 人の大人たち-父・母・メメ-への「喪の作業」をコフマンは生涯を通じた哲学的営為を通じて遂行していたといえる。また、『オールドネル通り、ラバ通り』に秘められた「笑い」は、もはやコフマン自身によっては、語られることはなかった、ある「赦し」の物語に開かれているのである。

補論「不安と《笑い》によるカタルシス-クラインとヒッチコック」

補論では、『オールドネル通り、ラバ通り』19 章で言及されたヒッチコックの映画『女が消える』(*The Lady Vanishes*, 1938 年公開、邦題『バルカン超特急』)について、コフマンの没後に発表された当映画の批評を参照し論じた。この映画がコフマンに喚起する二人の《母》をめぐる幼年期の不安をメラニー・クラインによる対象関係論を手掛かりに分析した。さらに、この作品が、弱い《父》の介入によりもたらされる、アリストテレス的ではない、「笑い」によるカタルシス効果を含意することを示した。

4. 参考文献

(1) サラ・コフマンの著書目録

コフマンの著書目録作成にあたり、1997 年に出版された『カイエドグリフ』誌サラ・コフマン追悼号(*Les Cahiers du Grif*,1997,p.176-190)に掲載された目録を参照した。この目録は、

ニーチェ研究者ダンカン・ラージ (DUNCAN, Large : 1945-) によって作成され、生前コフマン自身による校閲を経ている。コフマンの死後に出版された書籍については、彼女のパートナーであるアレクサンドル・キリトソス KIRITSOS, Alexandre による校閲が行われた。

われわれは、コフマンの死後（つまり彼女が目を通していない）1994年から1995年についての書誌情報の誤り（例えば1994gの書籍タイトルと編者名）は正し、表記方法を統一した。1997年の書誌情報および日本語の記載に関しては、上掲書の翻訳である『サラ・コフマン讃』（未知谷、2005年）において、木村信子・棚沢直子両氏が行った補足を参照した。目録内の全項目の再確認および必要な加筆（例えば« Sacrée nourriture »（1980）の初訳者である神山すみ江の名を追記）、さらに2005年以降の書誌情報の追加を行った。また、コフマンの著作は英語・ドイツ語・スペイン語等に翻訳されているが、本参考文献表において翻訳に関する記載については、『窒息する言葉』（1987a）を除いて、日本語に限定した。なお、目録内におけるS.K.のイニシャルはサラ・コフマンのことである。

1963

« Le problème moral dans une philosophie de l'absurde », *Revue de l'enseignement philosophique*, 14/1(octobre-novembre), p.1-7. Repris dans *Séduction* (1990a), p.167-181.

1968

« Métamorphose de la volonté de puissance du judaïsme au Christianisme d'après "Antéchrist" de Nietzsche », *Revue de l'enseignement philosophique*, 18/3 (février-mars), p.15-19.

1969

« Freud et Empédocle », *Clitique*, 25/265(juin), p.525-550 [compte rendu des textes de Jean Bollack, *Emédocle* (Minuit, 1965) et Sigmund Freud, *Analyse terminée et analyse interminable*, trad. Par A. Berman, *Revue française de psychanalyse*, n°2, (1939)]. Publication revue et corrigée dans *Quatre romans analytiques* (1974a), p.31-66.

1970

a) *L'enfance de l'art. Une interprétation de l'esthétique freudienne*, Payot, coll. Bibliothèque scientifique ; 2° édit., Petit Bibliothèque Payot, coll. Science de l'homme, 1975 ; 3° édit., Galiée, coll. Débats, 1985, augmentée de « Délire et fiction (à propos de *Délire et rêves dans la Gradiva de Jensen* de Freud) » (cf.1974c), p.251-281.

b) « Généalogie, interprétation, texte », *Critique*, 26/275(avril), p.359-381[compte rendu du livre de Jean Granier, *Le problème de la vérité dans la philosophie de Nietzsche*, Seuil, 1966]. Publication revue et corrigée dans *Nietzsche et la métaphore* (1972a), p.173-206.

1971

a) « Nietzsche et la métaphore », *Poétique*, n°5 (printemps), p.77-98. Publication revue et augmentée dans *Nietzsche et la métaphore* (1972a).

b) « L'oubli de la métaphore », *Critique*, 27/291-292 (août-septembre), p.783-804[compte rendu

de Nietzsche, *Das Philosophenbuch/le livre du philosophie : Études théoriques*, trad. par Geneviève Bianquis, 12^e édit., Gallimard, 1949 ; *La naissance de la philosophie à l'époque de la tragédie grecque*, trad. par Geneviève Bianquis, 7^e édit., Gallimard, 1938]. Publication revue et augmentée dans *Nietzsche et la métaphore* (1972a)

- c) « Judith, ou la mise en scène du tabou de la virginité », *Littérature*, n°3 (octobre), p.100-116. Publication revue et corrigée (sous un nouveau titre, « Judith ») dans *Quatre romans analytiques* (1974a), p.67-98.

1972

- a) *Nietzsche et la métaphore*, Payot, coll. Bibliothèque scientifique ; 2^e édit., Galilée, coll. Débats, 1983. Augmenté de « Appendice : généalogie, interprétation, texte » (cf.1970b), p.173-206.

(『ニーチェとメタファー』宇田川博訳、朝日出版社、1986年。)

- b) « Résumer, interpréter », *Critique*, 28/305 (octobre), p.892-916[compte rendu de Sigmund Freud, *Délire et rêves dans la Gradiva de Jensen*, Gallimard, coll. Idées, 1971]. Publication revue et corrigée (sous un nouveau titre, « Résumer, interpréter (*Gradiva*) ») dans *Quatre romans analytiques* (1974a), p.99-134.

1973

- a) *Camera Obscura. De l'idéologie*, Galilée, coll. La philosophie en effet.

- b) « Le/les “concepts” de culture dans les “Intempestives” ou la double dissimulation », dans *Nietzsche aujourd'hui ?* (actes du colloque de Cerisy-la-Salle, juin 1972), 2 vol., UGE,10/18 ; vol.II, « Passion », p.119-146 (discussion relative à la p.151 ; interventions continues de S.K. : vol. I, p.180, 182, 215, 288, 367 ; vol.II, p.85 et 181). Repris (sans la discussion) dans *Nietzsche et la scène philosophique* (1979b), p.337-371.

- c) « Un philosophe “unheimlich” », dans *Écartés. Quatre essais à propos de Jacques Derrida*, de Lucette Finas, Sarah Kofman, Roger Laporte et Jean-Michel Rey, Fayard, coll. Digraphe, p.107-204. Repris (avec des notes complémentaires) dans *Lecture de Derrida* (1984a), p.11-114. (「デリダ = 《umheimlich》な哲学者」庄田常勝訳、『現代思想』12月号、青土社、1983年、122頁～147頁。)

1974

- a) *Quatre romans analytiques*, Galilée, coll. La philosophie en effet. Augmenté de : « Freud et Empédocle », p.31-66 (cf. 1969) ; « Judith », p.67-98 (cf.1971c) ; « Résumer, interpréter (“*Gradiva*”) », p.99-134 (cf.1972 b) ; « Le double e(s)t le diable. L'inquiétante étrangeté de l'homme au sable (*Der Sandmann*) », p.81-135 (cf.1974b).

- b) « Le double e(s)t le diable. L'inquiétante étrangeté de *L'homme au sable (Der Sandmann)* », *Revue française de psychanalyse*, 38/1 (janvier/février), p.25-56. Publication revue et corrigée dans *Quatre romans analytiques* (1974a), p.81-135.

- c) « Délire et fiction (à propos de *Délire et rêves dans la Gradiva de Jensen* de Freud », *Europe*,

539 (mars) (numéro spécial « Freud »), p.84-165. Repris dans *L'enfance de l'art* (3^e édit., 1985, p.251-281) (cf. 1970a).

1975

- a) « Vautour rouge. Le double dans les *Élixirs du diable* d'Hoffmann », in *Mimesis des articulations*, de Sylvaine Agacinski, Jacques Derrida, Sarah Kofman, Philippe Lacoue-Labarthe, Jean-Luc Nancy et Bernard Pautrat, Aubier-Flammarion, coll. La philosophie en effet, p.95-163.
- b) « Baubô. Perversion théologique et fétichisme chez Nietzsche », *Nuova Corrente*, 68-9 (1975-1976) (numéro spécial « Nietzsche »), p.648-680. Publication revue et corrigée dans *Nietzsche et la scène philosophique* (1979b), p.263-304.

1976

- a) *Autobiogriffures*, Christian Bourgois ; 2^e édit, *Autobiogriffures. Du chat Murr d'Hoffmann*, Galilée, coll. Débats, 1984.
- b) « “Ma vie” et la psychanalyse (janvier 76, fragment d'analyse) », *Première livraison*, 4 (février-mars). Repris dans *Trois*, 3/1 (automne 1987), p.18 (cf. 1987 c), *La part de l'œil*, n°9 (numéro spécial « Arts plastiques et psychanalyse II », 1993), p.83 et *Les cahiers du GRIF*, Hors - Sérien n°3 (1997), p.171-172.
(「《私の生》と精神分析」木村信子訳『サラコフマン讃』、未知谷、2005年、271頁～273頁。)
- c) « Six philosophes occupés à déplacer le philosophique à propos de la “mimesis” », *La quinzaine littéraire*, 231(16-30 avril), p.19-22 (S.K., p.19-21) [entretien de group avec Sylvaine Agacinski, Jacques Derrida, Sarah Kofman, Philippe Lacoue-Labarthe, Jean-Luc Nancy et Bernard Pautrat ; questions de Jean-Louis Bouttes, Roger Dadoun, Christian Descamps, Gilles Lapouge et Maurice Nadeau].
- d) « Tombeau pour un nom propre », *Première livraison*, n°5 (avril-mai). Repris dans *trois*, 3/1 (automne 1987), p.20, *La part de l'œil*, n°9 (numéro spécial « Arts plastiques et psychanalyse II », 1993), p.84 (avec « post-scriptum-1992 ») et *Les cahiers du GRIF*, Hors - Sérien n°3(1997), p.169-170.
(「自分自身の名のための墓碑」木村信子訳『サラコフマン讃』、未知谷、2005年。)

1977

- a) « Philosophie terminée. Philosophie interminable », dans *Qui a peur de la philosophie ?*, par le GREPH [Groupe de recherches sur l'enseignement philosophique], Flammarion, coll. Champs, p.15-37. Repris, augmenté de notes, dans *Lectures de Derrida* (1984a), p.84-153.
- b) « Sarah Kofman » entretien, dans François Laruelle, *Le déclin de l'écriture*, suivi d'*Entretiens avec Jean-Luc Nancy, Sarah Kofman, Jacques Derrida et Philippe Lacoue-Labarthe*, Aubier-Flammarion, coll. La philosophie en effet, p.260-266.

1978

- a) *Aberrations. Le devenir-femme d'Auguste Comte*, Aubier-Flammarion, coll. La philosophie en effet.
- b) « Qui a peur de philosophie ? », *Noroît* (janvier-avril), p.224-227 [discussion de table ronde avec Sylvaine Agacinski, Roland Brunet, Jacques Derrida et Sarah Kofman]
- c) « L'espace de la césure », *Clitique*, 34/379(décembre), 1143-1150 [compte rendu de Philippe Lacoue-Labarthe, *Hölderlin. L'Antigone de Sophocle*, traduction française suivie de La césure du spéculatif (Christian Bourgois, coll. Première livraison, 1978)]. Publication revue et corrigée dans *Mélancolie de l'art* (1985a), p.71-86.

1979

- a) *Nerval : le charme de la répétition. Lecture de « Sylvie »*,(Lausanne, L'Age de l'Homme, « Cistre Essais », p.6).
- b) *Nietzsche et la scène philosophique*, UGE, 10/18 ; 2^e édit., Galiée, coll. Débats, 1986. Augmenté de : « Annexe : Baubô. Perversion théologique et fétichisme », p. 263-304(cf.1975b) ; « Appendice : Le/les "concepts" de culture dans les *Intempestives ou la double dissimulation*, p.37-371 (cf.1973 b).
- c) « Nerval sur le divan » entretien avec Lucette Finas sur *Nerval : Le charme de la répétition* (1979 a), *La quinzaine littéraire*, 306 (16-31 juillet), p.17.

1980

- a) *L'énigme de la femme. La femme dans les textes de Freud*, Galiée, coll. Débats ; 2^e édit., 1983 ; 3^e édit., 1994 ; Le livre de poche, coll. Biblio essai, 1996. (『女の謎—フロイトの女性論』鈴木晶訳、せりか書房、2000年。)
- b) « La mélancolie de l'art », dans *Philosopher. Les interrogations contemporaines. Matériaux pour un enseignement*, Christian Delacampagne et Robert Maggiori (sous la dir. de), Fayard, p.415-427. Publication revue et corrigée dans *Mélancolie de l'art* (1985 a), p.9-33.
- c) « Sacrée nourriture », dans *Manger*, Christian Besson et Catherine Weinzaepflen (sous la dir. de), Liège, Yellow Now ; Chalon-sur-Saône, Maison de la culture, p.71-74. Repris dans *Trois*, 3/1 (automne 1987), p. 17 (cf.1987c), *La part de l'œil*, n°9 (numéro spécial « Arts plastiques et psychanalyse II »,1993), p.85 et *Les cahiers du GRIF*, Hors - Série n°3,1997, p.167-168. (「聖なる食事」神山すみ江訳、『現代思想』11月号／12月号、青土社、1991年。 : 木村信子訳、前掲書、未知谷、2005年、265頁～267頁。)

1981

- a) « Ça cloche », dans *Les fins de l'homme. A partir du travail de Jacques Derrida*, Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy (sous la dir.de), Galilée (actes du colloque de Cerisy-la-Salle, 23 juin-2 août 1980), p.89-112(discussion relative à la p.116 ; interventions continues de S.K. : p.16, 47, 86-87, 184, 196, 199, 310, 341, 365, 391-392, 410, 480, 497, 650-651). Repris (sans la discussion mais augmenté de notes)dans *Lectures de Derrida*(1984a),

p.115-151.

- b) [2 illus.] dans Françoise Metz, « Ombrelles, ou la puissance fantastique de l'écriture » [compte rendu de Aberrations. *Le devenir-femme d'Auguste Comte* (1978a), *Nerval : le charme de la répétition* (1979a), et *Nietzsche et la scène philosophique* (1979b)], *Avant-Guerre*, 2(1981), p.91.

1982

- a) *Le respect des femmes (Kant et Rousseau)*, Galiée, coll. Débats. (部分訳「< 尊敬 = 敬遠 > のエコノミー—カントの場合 / 症例」庄田常勝訳、『現代思想』1月号 / 3月号、青土社、1985年。)
- b) « La femme autrement dite », *les nouveaux cahiers*, n°70 (automne), p.80 [compte rendu de Catherine Chalier, *Figures du féminin. Lecture d'Emmanuel Lévinas*, La Nuit surveillée, 1982].

1983

- a) *Comment s'en sortir?*, Galiée, coll. Débats.
- b) *Un métier impossible. Lecture de « Constructions en analyse »*, Galiée, coll. Débats.

1984

- a) *Lectures de Derrida*, Galiée, coll. Débats. Augmenté de : « Un philosophie “ unheimliche ” », dans *Écartés. Quatre essais à propos de Jacques Derrida*, de Lucette Finas, Sarah Kofman, Roger Laporte et Jean-Michel Rey, Paris, Fayard, coll. Digraphe, p.107-204, 1973, « Ça cloche », dans *Les fins de l'homme. A partir du travail de Jacques Derrida*, Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy (sous la dir.de), Galiée (actes du colloque de Cerisy-la-Salle, 23 juin-2 août 1980), 1981, p.89-112, « Philosophie terminée. Philosophie interminable », dans *Qui a peur de la philosophie?*, par Le GREPH [Groupe de recherches sur l'enseignement philosophique], Paris, Flammarion, coll. Champs, 1977, p.15-37.
- b) « La ressemblance des portraits (A propos du Salon de 1767 consacré à La tour) », *L'esprit créateur*, 24/1 (printemps), p.13-32. Repris dans *Rencontres de L'École du Louvre*, septembre (numéro spécial « L'imitation »), p.215-230. Publication revue et corrigée (sous un nouveau titre, « La ressemblance des portraits : l'imitation selon Diderot ») dans *Mélancolie de l'art* (1985 a), p.35-70.
- c) « Il y a quelqu'un qui manque », *Le temps de la réflexion*, n°5, p.430-441 [compte rendu de Denis Hollier, *Politique de la prose : Jean-Paul Sartre et l'an quarante*, Gallimard, 1982]. Publication revue et augmentée (avec son nouveau titre « Sartre : Fort ! ou Da ? ») dans *Séductions* (1990 a), p.139-166.

1985

- a) *Mélancolie de l'art*, Galiée, coll. Débats. Augmenté de : « La mélancolie de l'art », p.9-33 (cf. 1980 b) ; « La ressemblance des portraits : l'imitation selon Diderot », p.35-70 (cf.1984b) ;

« L'espace de la césure », p.71-86.

- b) Resseau und die Frauen, trad. par Ruthard Stäblin, Tübingen, Rive Gauche, Lonkursbuchverlag Claudia Gehrke, « Wegweisende Worte ». Augmenté de 4 illus.de S.K. Français : « Les fins phallogocraques de Rousseau », Cahiers de l'ACFAS, n°44 (numéro spécial « Égalité et différence des sexes »), 1986, p.341-358.
- c) *L'enfance de l'art. Une interprétation de l'esthétique freudienne*, Payot, coll. Bibliothèque scientifique ; 3^e édit., Galiée, coll. Débats, 1985, augmentée de « Délire et fiction (à propos de *Délire et rêves dans la Gradiva de Jensen* de Freud) » (cf.1970a/1974c), p.251-281. (『芸術の幼年期—フロイト美学の一解釈』赤羽研三訳、水声社、1994年。)

1986

- a) *Pourquoi rit-on? Freud et le mot d'esprit*, Galiée, coll. Débats. (『人はなぜ笑うのか？—フロイトと機知』港道隆・神山すみ江・中村典子訳、人文書院、1998年。)
- b) « Entrevista com Sarah Kofman conduzida por Chakè Matossian », *Revista de comunicação e linguagens*, n°3 (juin) (numéro spécial «Textualidades»), p.143-147.
- c) « Nietzsche et l'obscurité d'Héraclite », *Furor*, n°15 (octobre), p.3-33. Publication revue et augmentée dans *Séductions* (1990 a), p.87-137.

1987

- a) *Paroles suffoquées*, Galiée, coll. Débats. (『窒息した言葉』大西雅一郎訳、未知谷、1995年。 *Smothered Words*. Trans. DOBIE, Madeleine, Evanston, IL: Northwestern University Press,1998.)
- b) *Conversions. Le Marchand de Venise sous le signe de Saturne*, Paris, Galiée, coll. Débats.
- c) « Trois textes », *Trois*, 3/1 (automne), p.16-20. Augmenté de : « Sacrée nourriture » (p.17, cf.1980 c) ; « Ma vie et la psychanalyse » (p.18,cf.1976b) ; « Tombeau pour un nom propre »(p.20, cf.1976 d). Augmenté de 2 illus. De S.K. (*Sur-moi*, p.16, et *La mort ou l'autisme*, p.19).
- d) Entretien avec Christa Stevens, *Stoicheia*, n°4 (décembre).
- e) « Sarah Kofman : de verleiging van een tegendraads filosofe » [entretien avec Christa Stevens], *Katijf*, n°42 (décembre 1987-janvier 1988), p.26-29. Augmenté d'une illus. de S.K., p.28.

1988

- a) « Gesprek met de France filosofe Sarah Kofman : “de vrouw is de skeptika, zij weet dat er geen waarheid achter de sluiers is” » [entretien avec Karen Vintges], *De Groene Amsterdammer*, 22 juin, p.20-21.
- b) « Miroir et mirages oniriques : Platon, précurseur de Freud », *La part de l'œil*, n°4, p.127-135. Publication revue et corrigée dans *Séductions* (1990a), p.61-86.
- c) « Sarah Kofman » [extrait d'un entretien avec Alice Jardine], trad. par Patricia Badoin, dans

« Exploding the Issue : French “Women” “Writers” and “The canon”? Fourteen Interviews », par Alice Jardine et Anne M. Menke, *Yale French Studies*, n°75 (numéro spécial « The Politics of Tradition : Placing Women in French Literature »), p.229-258 (S.K. : p.246-248) ; repris dans *Displacements : Women, Traditions, Literatures in French*, Joan DeJean et Nancy K. Miller (sous la dir. de), Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1990. Entretien complet dans *Shifting Scenes* (1991 f).

- d) « Shoah (ou la Dis-Grâce) », *Les nouveaux cahiers*, n°95 (hiver 1988-1989), p.67. Repris dans *Actes*, p.67-68 (numéro spécial « Droit et humanité ») (septembre 1989).

1989

- a) *Socrate(s)*, Paris, Galiée, coll. La philosophie en effet.
- b) « Autour de Socrate(s). Rencontre avec Sarah Kofman » [entretien avec Ghyslaine Guertin], *La petite revue de philosophie* (printemps) (numéro spécial « Psychologie et connaissance de soi »), p.117-129.
- c) « L'efficace du simulacre », *Autrement dire*, n°6 (numéro spécial « Simulacres »), p.141-149. Tiré de « *Séductions : essai sur La religieuse de Diderot* », dans *Séductions* (1990 a).

1990

- a) *Séductions. De Sartre à Héraclite*, Paris, Galiée, coll. La philosophie en effet. Augmenté de « *Séductions. Essai sur La religieuse de Diderot* », p.9-60 (cf. 1989 c) ; « Miroir et mirages oniriques. Platon précurseur de Freud », p.61-86 (cf. 1988 b) ; « Nietzsche et l'obscurité d'Héraclite », p.87-137 (cf. 1986 c) ; « Sartre ; Fort ! ou Da ? », p.139-166 (cf.1984 c), « Appendice : Le problème moral dans une philosophie de l'absurde », p.167-181 (cf.1963).
- b) « Au-delà de la mélancolie » [réponse à un questionnaire sur Sartre], *Libération*, 23-24 juin, p.25.
- c) « Un battu imbattable. Sur *Larmes de Clown* de Victor Sjöström », *Théâtre/public*, n°92, p.55.

1991

- a) *Don Juan ou le refus de la dette*, en coll. avec Jean-Yves Masson, Galiée, coll. Débats. Augmenté de « L'art de ne pas payer ses dettes (Molière) », S.K., p.63-121. (コフマン執筆部分：モリエール論「負債を返さぬ方法」、神山すみ江訳、『現代思想』、四月号／五月号、一九九四年。)
- b) *Il n'y a que le premier pas qui coûte : Freud et la spéculation*, Galiée, coll. Débats.
- c) « Schreiben ohne Macht » [entretien avec Ursula Könnertz], *Die Philosophin* 2/3 (1991), p.103-109.
- d) « Tot, unsterblich », *Die Philosophin*, 2/3 (1991), p.111-112.
- e) 「この女を見よ—あるいは人はいかにして哲学者-女性となるのか」(港道隆との対談、神山すみ江訳)、『現代思想』、11月号／12月号、青土社、1991年、223頁～232頁。)

- f) « Sarah Kofman » [entretien avec Alice Jardine] ,trad.par Janice Orien, dans *Shifting Scenes :Interviews on Women, Writing, and Politics in Post-68 France*, Alice A.Jardine et Anne M.Menke (sous la dir.de), New York et Oxford, Columbia University Press, « Gender and Culture », p.104-112.

1992

- a) *Explosion I. De « l'Ecce Homo» de Nietzsche*, Galiée, coll. La philosophie en effet.
- b) « La question des femmes, une impasse pour les philosophie » [entretien avec Joke J. Hermsen, *Les Cahiers du Grif*, n°46(printemps)(numéro spécial « Provinces de la pensée : Femmes/philosophie »),p.65-74.
- c) « La question des femmes, une impasse pour les philosophie » [entretien avec Joke J. Hermsen, *Les Cahiers du Grif*, n°46(printemps)(numéro spécial « Provinces de la pensée : Femmes/philosophie »),p.65-74. (「女の問題、哲学者の袋小路」(ヨーケ・ヘルムセンとの対談) 芝崎和美訳、棚沢直子編『女たちのフランス思想』所収、勁草書房、1998年。)
- d) « Nietzsche et Wagner. Comment la musique devient bonne pour les cochons », *Furor*, n°23(mai), p.5-28 (version légèrement modifiée de 1993d.).

1993

- a) *Explosion II. Les enfants de Nietzsche*, Galiée, coll. La philosophie en effet.
- b) « Interview avec Sarah Kofman, 22 mars 1991. Subvertir le philosophique ou Pour un supplément de jouissance »[entretien avec Evelyn Ender], *Compar(a)ison*, n°1(janvier),p.9-26. (「哲学的なものを壊乱すること、あるいは喜びの代補のために」(イヴリン・エンダーとの対談) 芝崎和美訳、『イマーゴ』5月号、1994年、238-259頁。)
- c) « Un autre Moïse ou la force de la loi », *La part de l'œil*, n°9 (numéro spécial « Arts plastique et psychanalyse II »), p.70-81.
- d) « L'idéal ascétique de Wagner selon Nietzsche », dans *L'art moderne et la question du sacré*, Jean-Jacques Milles (sous la dir.de), Le Cerf, p.43-65 (première version de 1992c).
- e) « Naissance et renaissance de la tragédie », suivi de «Sagesse tragique », *La métaphore* (revue), n°1(printemps), p.77-102 et p.103-114. Pré-publication de deux chapitres de 1993a.

1994

- a) *Rue Ordener, rue Labat*, Paris, Galiée. (『オルドネル通り、ラバ通り』庄田常勝訳、未知谷、1995年。)
- b) « L'esprit, l'humour, la mort et Freud selon Sarah Kofman » [entretien avec Lucien Degoy], *L'humanité*, 25 janvier.
- c) « Les mains d'Antelme. Post-scriptum à Paroles Suffoquées », *Lignes*, 1994/1(n°1), Hazan.
- d) *Le mépris des Juifs. Nietzsche, les juifs, l'antisémitisme*, Galiée, coll. La philosophie en effet.
- e) « Et pourtant elle tremble (Nietzsche et Voltaire) », *Furor*, n°26 (septembre), Genève, Furor.
- f) « L'imposture de la beauté », *Autrement* (octobre), n°148.
- g) « Wagner's Ascetic Ideal According to Nietzsche », dans *Nietzsche, Genealogy, Morality :*

Essay on Nietzsche's On the Genealogy of Morals, ed. Richard Schacht, Berkeley London/Los Angeles, University of California Press.

1995

- a) *L'imposture de la beauté*, Galiée, coll. La philosophie en effet [rassemblant 1990c, 1992c, 1993c, 1994 e, 1994f et « Angoisse et catharsis »].
- b) « La mort conjuguée », *La part de l'œil*, n°11, Bruxelles.

1997

Les Cahiers du GRIF, Hors-Sérien°3, Sarah Kofman., coll. Parcourir, Persée. (コラン,F., ナンシー,J=L、デリダ,J 他『サラコフマン讃』棚沢直子・木村信子訳、未知谷、2005年。)

(2) サラ・コフマンについての著作・論文

芝崎和美「女性解放思想史講座—サラ・コフマン近代のアポリアを超えて」『季刊女子教育もんだい』60号、1994年、85頁～92頁。

木村信子「サラ・コフマン—生が作品にもたらすもの—」『L'Arche』11号、明治大学大学院仏語仏文学科研究会、2000年、79頁～92頁。

棚沢直子「サラ・コフマン：狂おしいほど好きな私の恋人ニーチェ」『女性空間』21号、日仏女性資料センター、2004年、41頁～46頁。

今崎高秀「『メタファー』について—サラ・コフマン『ニーチェとメタファー』から—」『哲学年誌』38号、法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻、2006年、73頁～90頁。

DEUTSCHER, Penelope and OLIVER, Kelly(ed). *Enigmas : Essays on Sarah Kofman*, New York, Cornell University Press, 1999.

CHANTER, Tina and ARMITT, Pleschette(ed). *Sarah Kofman's corpus*, New York, State University of New York Press, 2008.

FEYERTAG, Karoline. *Eine Biographie*, Wein-Berlin, Verlag Turia + Kant, 2014.

FRACKOWIAK, Mathieu. *Sarah Kofman : Et le devenir-femme des philosophes*, coll. Hermann Philosophie, Paris, Hermann, 2012.

ULLERN, Isabelle. « Construction en philosophe ? Autour d'une lettre d'André Green à Sarah Kofman », *Revue française de psychanalyse*, vol. 79, Paris, PUF, 3 /2015.

ULLERNE, Isabelle et GISEL, Pierre (sous la dir. de). *Penser en commun? Un « rapport sans rapport »*, Paris, Beauchesne, 2015.

(3) その他の参考文献

岡田温司『フロイトのイタリア-旅・芸術・精神分析』、平凡社、2008年。

定藤博子「戦間期フランスのポーランド移民研究の動向～SGI研究を中心に～」、『大阪大学経済学』、60(4)、p.84-p.93、2011年3月。

シェインドリン,レイモンド・P.『ユダヤ人の歴史』入江則夫訳、河出文庫、2012年。

スィーガル, H. 『メラニー・クライン入門』 岩崎徹也訳、岩崎学術出版社、1977年。

棚沢直子編 『女たちのフランス思想』、勁草書房、1998年。

トリュフォー, F.・ヒッチコック, A. 『定本 映画術 改訂版』 山田宏一・蓮実重彦訳、晶文社、1990年。

中澤務 「プラトンはなぜ詩人を批判したか（1）-ソクラテスと吟遊詩人-」、『北海道大学文学研究科紀要』105号、2001年、pp.1-19.

信田さよ子 『それでも、家族は続く-カウンセリングの現場で考える』、NTT出版、2012年。

ハウマン, H. 『東方ユダヤ人の歴史』 平田達治・荒島浩雅訳、鳥影社、1999年。

ファイヨル入江容子 「カッサンドラの叫び、サラの叫び-サラ・コフマン『オールドネル通り、ラバ通り』に見る父の不在の痕跡」、『女性空間』第34号、日仏女性資料センター（日仏女性研究学会）、2007年6月、38-48頁。

フロイト, S. 『フロイト全集 21』 道籙泰三・福田覚・渡邊俊之訳、岩波書店、2011年。

マルクス, K.・エンゲルス, F. 『共産党宣言-付 十二か国宣言・六十四か国宣言-』 塩田庄平衛訳、角川文庫、1959年

クライン, M. 『メラニー・クライン著作集 4（1946～1955）-妄想的・分裂的世界』 小此木啓吾・岩崎徹也編訳、誠信書房、1985年

渡辺千尋 「两大戦間期フランスにおける国民の概念とその変容-1927年国籍法の改正を中心に-」 『ヨーロッパ研究』、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、2007年、p.153-171。

ADRNO, Theodor. W. *Negative Dialektik*, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 1970.

BARUCH, Marc Olivier. *Le régime de Vichy 1940-1944*, Nouvelle édition revue et augmentée, coll. TEXTO, Paris, Tallandier, 2017.

BAUDRY, Jean-Louis. « Freud et « la création littéraire » », dans *Tel Quel* n°32, Paris, Seuil, hiver 1968, pp.63-85.

BRECHT, Bertolt. *Gesammelte Werke in 20 Bänden*, Bd.16, Frankfurt a. M., 1967

BLANCHOT, Maurice. *L'Entretien infini*, Paris, Gallimard, 1969.

L'Écriture du désastre, Paris, Gallimard, 1980.

CHASKALOVIC, Anate. *Lumière hassidique et littérature. Histoire d'un mouvement révolutionnaire*, Paris, Safed, 2003.

DERRIDA, Jacques. *Foi et savoir*, Paris, Seuil, 2000.

FEYERTAG, Karoline. *Sarah Kofman Ein Biographie*, Wien-Berlin, TURIA+KANT, 2014.

FREUD, Sigmund et FERENCZI, Sándor. *Correspondance, II*, Paris, Calmman-Lévy, 1996

GRYNBERG, Anne. *La Shoah : L'impossible oublié*, Paris, Gallimard, 1995.

HEIDEGGER, Martin. « Sein und Zeit », herausgegeben von HERRMQANN, Friedrich-Wilhelm von. *Gesamtausgabe (Heidegger)*, Abt.1 Veröffentlichliche Schriften Bd.2, Frankfurt am Main, Klostermann, 1977.

JOLY, Laurent. *Vichy dans la « solution finale ». Histoire du commissariat général aux questions juives (1941-1944)*, Paris, Bernard Grasset, 2006.

KAMIENIAK, Isabelle et KASWIN-BONNEFOND, Danielle. « Inhibition : argument », *Revue française de psychanalyse*, vol.73, Paris, PUF, 2009/2, pp.325-330.

KAMIENIAK, Jean-Pierre. « Freud, la psychanalyse et la littérature », dans *Le Coq-héron*, n°204, Paris, ERES, pp.64-73.

KEMP, Martin and PALLANTI, Giuseppe. *Mona Lisa: The People and the Painting*, Oxford, Oxford University Press, 2017.

LÉVINAS, Emmanuel. « L'inspiration religieuse de l'alliance » (1935), *Cahier de l'Herne*, dirigé par CHALIER, C. et ABENSOUR, M., Paris, Herne, 1991.

LÉVIY, Claude et TILLARD, Paul. *La grande rafle du Vel d'Hiv (16 juillet 1942)*, 2010.

MENKE-ADLER, Hede. « Penser/rêver, no3, printemps 2003 », dans *Revue française de psychanalyse*, n°68, 2004/2, pp.703-713.

MEGARGEE, Geoffrey P and DEAN, Martin(ed). *The United States Holocaust Memorial Museum encyclopedia of camps and ghettos, 1933-1945. Volume II, Part A, Ghetto in German-occupied Eastern Europe*, Bloomington, Indiana University press, 2012.

SOLLERS, Philippe. « La science de Lautréamont », dans *Logiques*, Paris, Seuil, 1968, pp.250-301.

SUSSMAN, Robert Wald. *The Myth of Race: The Troublesome Persistence of An Unscientific Idea*, Cambridge, Harvard University Press, 2016.

(4) 映像作品

TSUR, Shiri(réalisateur). *Rue Ordener, rue Labat* (documentaire, 1995), KOFMAN, Sarah. *Rue Ordener, rue Labat* (d'après de livre), <https://www.youtube.com/watch?v=brKk-odePBI>, Paris, Production Femis, (accès le 14 juillet 2017 à 7h23)

HITCHCOCK, Alfred. (director) /GILLIAT&LAUNDER(playbook) (1938, *Lady vanishes*) , *The Wheel Spins* by WHITE, Ethel Lina.(the original work), 『バルカン超特急』 [DVD], 日本, (株) ファーストトレーディング。

(5) インターネット資料

Comité Française pour Yad Vashem.

L'histoire de CHEMITRE, Claire. (Année de nomination : 1989, Dossier n°4388),

URL:<https://yadvashem-france.org/les-justes-parmi-les-nations/les-justes-de-france/dossier-4388/>
(2017年7月2日3時30分)

DHAVERNAS, Chatherine and CARSON, James. “Finding Sarah Kofman : Verifying Holocaust Testimony and the Perils of Meaning”, *Narrative Matters*, Jun 2014, Paris, France., URL :<https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01077075/document>(accès le 3 juillet 2017 à 6h22)

FEYERTAG, Karoline.

Interview avec Alexandre Kyritsos (le 29 juin 2017),

URL:feyertag.Kling.org/data/interviews_Kyritsos.pdf (accès le 14 juin 2017 à 5h22)

YAD VASHEM The Word Holocaust Remembrance center.

Personal Information of CHEMITRE, Claire.,

URL: <http://db.yadvashem.org/righteous/righteousName.html?language=en&itemId=4014299>,
(参照日 2017年7月2日3時32分)

(6) その他の資料

ドランシー一時収容所からの移送車リスト原本の写し

KOFMAN,Berek. Liste originale du convoi de déportation N°12 du 29-07-42, ARCHIVES DU MÉMORIAL DE LA SHOAH,17, rue Geoffroy l'Asnier-75004 PARIS(Tél.01 42 77 44 72-Fax 01 53 01 17 44), URL : http://192.168.16.27//ressources/32/Mms-1011005_M.jpg(accès le 25 Août 2017)

GOLDENBERG,Hélène. Liste originale du convoi de déportation N°26 du 31-08-42, ARCHIVES DU MÉMORIAL DE LA SHOAH,17, rue Geoffroy l'Asnier-75004 PARIS(Tél.01 42 77 44 72-Fax 01 53 01 17 44), URL : http://192.168.16.27//ressources/35/Mms-1011693_M.jpg(accès le 25 Août 2017)